



— 小・中学校編 —

先輩教師からのメッセージ

先輩教師からのメッセージ

— 小・中学校編 —

まえがき

「団塊の世代」の大量退職に伴い、様々な分野において、長年にわたり蓄積してきた知識や技能をいかに後進に伝承するかが、社会全体の課題となっております。

教育の分野におきましても、教育職あるいは教育行政職としての専門的な知識・技能や実践的指導力を、後輩教職員に伝えていくことが求められているところであります。

本県の小・中学校の「団塊の世代」にあたる教職員の方々は、採用の非常に少なかった年代に教職に就かれました。以来、学校教育を取り巻く環境は、高度経済成長、国際化、情報化、少子化といった時代の流れの中で、大きく変化し続けてきました。これらに伴って生じた様々な課題や問題に対応しながら、「団塊の世代」の教職員の方々は、まさに学校の中核として、児童生徒の指導に尽力されてきました。

当センターでは、「団塊の世代」に蓄積された知恵を後世に伝え、本県の学校教育の充実に役立てるため、この度、「団塊の世代」の教職員に、後輩教職員にぜひ伝えたいことについて執筆を依頼し、長年の教職体験を踏まえた経験知を小冊子にまとめました。

お寄せいただいた玉稿は、それぞれ学習指導や児童・生徒指導、自己啓発等の視点から書かれており、後輩教職員が日頃の教育活動を展開するに当たり、示唆を得られるものと確信しております。

学校をはじめ関係機関においては、本冊子の作成の意図をご理解いただき、教育活動の充実に向けての一助として、ご活用いただければ幸いです。

平成十九年十一月

栃木県総合教育センター所長 五味田 謙 一

目次	
まえがき	1

授業を創る

持ち続けたいもの	高橋 久子	8
教師の姿が見える教育を	山市 隆	10
「確かな学力」の向上のために	後藤 盛雄	12
子どもたちから学んだこと	糸川 ヒロ子	14
授業「ヴェロニカ」を通して	小口 ヒサ子	16
見えない力	峯岸 ゆきえ	18

心の絆

子どもに育てられて	出島 淳子	22
子どもから学ぶ	山端 全祐	24
私の定期預金	大坪 悟	26
学級通信を日刊で発行していたころ	赤堀 明弘	28
子どもは担任を通り過ぎていく存在	鮎瀬 洋	30
出会いの中で	吉川 悦子	32
担任の力	岡本 允久	34

使命感

これからの学校事務	堀川 實	38
不易なものを追い求め続けて	渡部 榮	40
「変わる」「変わらない」	岩井 利男	42
生涯一教師	大出 尚美	44
心の交流 ～内面理解を重視して～	角田 静雄	46
進路選択力	大森 敏	48
新たなことに挑戦を	神山 学	50
養護教諭として勤務する中で	古澤 隼子	52

自己を磨く

「惚れる」ことで見えてくる	高田 實	56
困難を乗り越えていける強さを	大野 薫	58
学ぶ・真似ぶ	綱川 雅子	60
教師として不易なこと	鈴木 希一	62
趣味の力	浅野 誠二	64
経験してきたことから	吉成 東	66
学びつつある教師のみ教える資格あり	岩田 昭	68
生きるとは学ぶこと	高橋 知俊	70

学校力を高める―組織の力・地域との連携―

「教職」生活で大事にしたいこと	大八木 俊夫	74
ピアサポート活動を通しての自尊感情の育成	小川 一男	76
心くばり	矢口 愛子	78
これからの学校事務の在り方	大野 道久	80
組織力を活かして	加藤 政雄	82
同一校勤務二十二年から得たもの	佐藤 啓一	84
地域の関係機関に協力していただいて	柳澤 文子	86

情熱を傾けて

生徒指導のできる教師に	手塚 二郎	90
「情熱・挑戦・思いやり」を忘れずに	向田 伸一	92
第一ステージを終えるにあたって	坂本 洋子	94
轍は遺ったか	寺内 徹	96
学校栄養職員としての食への取り組み	安齋 富美子	98
退職を前に思うことなど	大平 安男	100

忘れ得ぬ出会い・言葉・出来事

私の原点	岡部 幸江	104
A先生から学んだこと：MAP	平野 憲一	106
過去にこんな言葉をいただきました	和田 須満子	108
読書の大切さ	栗田 正幸	110
担任教師の一言から…	赤間 松三	112
「ことばの教室」に学ぶ ―出会いと教訓―	小池 貞雄	114
たくさんのお会いに感謝	滝口 節子	116

編集後記

118

授業を創る

持ち続けたいもの

「願いを形にしよう」と題した五年生全児童の作品が廊下に掲示されていた。担任に聞いたところ、粘土の作品は壊れやすく家に持ち帰っても保存しづらいことから、写真に撮り、作ったときの思いを添え、最後の感想も加えてA4サイズ一枚にまとめ掲示したということだった。

夏休み前の全校集会はこの話をしようと心に決めた。その晩遅く、天袋に仕舞っておいたダンボールの箱を取り出した。二十数年仕舞ったまま、いや、家の建替え時に移動した時にも中は開けていないので、正確には四十数年ぶりになる。ダンボールは劣化して引き出そうすると破れてしまったが、私の小・中学校時代の作品は無事保存されていた。プリントやテスト類、そしてノートは変色してセピア色になり、触れるとぼろぼろと崩れそうであったが、絵や習字の作品は当時とほとんど変わらない状態で出てきた。それらを見てみると、四十数年前にタイムスリップしたかのよう。不思議なもので、今まで忘れていたその時の思いや惑い・感動がよみがえり、私の心は小学生時代に戻っていた。深夜遅くまで自分の過去の作品一つ一つに見入っていた。

全校集会では、五年生の掲示物の話から、私の小学校時代の作品を紹介して、「自分の宝物を残して、世界にたった一つしかない宝箱を作ろう。国語や算数でも、図工やその他の教科でも、簡単に捨ててしまえるものではなく、いつまでも残しておきたいものを、一つでも多く仕上げよう。」と呼びかけた。

「私の宝箱」を見直すと、子どもの気持ちがよく分かる。小中学校時代の膨大な作品から今ある物を選んで残したのは当時の私自身である。誤字脱字があったり拙い物であったりで、決

して優秀な誇れる物ではない。苦勞して取り組み悩みながらも自分で決めたことや、こつこつ努力したことが分かる物ばかりである。ある書道展に出品するために何十枚も練習したが、字配りがうまくいかず、本意ながら指導者のお手本を写した作品が出品されたことがあった。賞に入った唯一の条幅である。しばらく家に飾ったが、私の宝箱には残らなかった。

私には苦い経験がある。教職に就いてまだ十年は経っていない頃、展覧会に出す版画の指導に夢中になったことがある。図工の指導は苦手だったが、先輩のように入選作品をたくさん出したいと思ったのである。題材を吟味し彫り方も研究して、事細かな指示をして制作の指導にあたった。その結果多数入選し、上位の賞に入った作品もあり、私自身は大いに満足だった。記念に手元に残したいと思い、拒否されると予想しながら「版木を学校に置いておけないか。」と頼んだところ、いとも簡単に「いらないからあげる。作品もいいよ。」と言われた。そう答えた児童が複数いたことに愕然とした。あれだけ時間をかけて制作したのに児童には作品に対する愛着はなかった。言われるとおりに彫っただけの作品でしかなかったのである。以後、図工に限らずどの教科でも児童の思いや興味関心を大切にし、授業のねらい達成を目指しながら、一人一人の自己実現に繋がるような指導を心がけ努力してきたつもりであるが、今振り返るとどれも未熟で、児童が持ち続けたいものを残せたのか、恥ずかしい限りである。

教師の都合や思い込みでなく、児童にとつて今何が大切で、必要なことは何かを見極めて授業に取り組むことが、児童の宝物を増やすことになるだろう。

全校集会の最後に、「五年生は作品を返してもらったら、捨ててしまふかな。」と聞いたら、首を大きく横に振っていた。持ち続けてくれると信じた。

教師の姿が見える教育を

私が教職に就いた昭和四十年代半ば、多くの先生は授業が終わると、教科書とたくさんのお菓子が入った大きな木の箱を抱え、チョークの粉を払いながら職員室に戻ってきた。そういった先生の教室を覗くと、白・黄・赤など巧みにチョークを使い分け、実にしっかりと丁寧な字で板書がなされ、何を勉強し、何が大切な事項なのかが一目瞭然であった。私にとっては、先生の仕事を象徴するかのような懐かしい光景である。今では、この光景から想像できる授業の全てを肯定することはできないが、私たちが忘れてきた、教師のあるべき姿が描かれてはいないだろうか。

一 見えなくなった教師の姿

子ども主体の学習が提唱されて二十数年になるが、それが正しく理解されることなく、教師が「教えるべきことはしっかり教え」「伝えるべきことはしっかり伝える」という、教師が前面に出て指導するという姿勢が誤りであるかのような「教師の姿が見えない教育」が続いている。教師が目標達成のための、明確な指導方針や具体的な手立てを持たないまま、子ども主体と称して、ただ単に子どもの意思に任せた活動が多く見られ、教育活動の設計者・実践者としての教師の姿が見えないのである。

二 教師の姿が見える教育を

学習の主体は子どもであっても、授業の主体は教師であることを忘れてはならない。子ども主体の学習といっても、本当はそこには、教科の哲学や教材観に裏打ちされた目には見えない、耳には聞こえない教師の巧妙な手綱捌きがなくてはならない。例えば、課題解決学習といって

も、あたかも子どもが課題を見つけたかのような、あたかも子どもが課題を解決したかのような、綿密な授業設計のもとでの授業、つまり、あたかも子どもが自ら活動しているかのように仕組まれた授業を子ども主体の学習というのではないだろうか。

そのために教師は、明確な指示・発問、明瞭な発音・発声、明解な板書・チョークの使い方などの指導技術や、目標の明確化、目標を達成するための展開の工夫などの指導方法を身に付けなければならない。今、基礎・基本の大切さが叫ばれているが、こういった教師の基礎・基本をしつかり身に付けなければならない。明確な目標とその達成のための具体的な手立てを持った、授業設計者・授業の主体者としての教師。意図的・計画的な発問や構造的な板書ができる教師。教えるべきことはしっかり教えることができる教師。そういった教師の姿が見えるところに教育が成り立つ。

このことは、児童・生徒指導にあっても同じである。子どもの視点に立った児童・生徒指導と言っても、ただ子どもの言い分に耳を傾けるだけではなく、是々非々を明確に伝え、大人の視点にまで子どもを引き上げる児童・生徒指導でなくてはならない。譲るに譲れない線は何か、引くに引けない線は何か、一線を画する態度の表明ができる教師。禁止、命令などをためらわない教師。時には、価値観や規則を押し付け納得させることができる教師。そういった人生の先輩としての教師の姿が見えてこそその児童・生徒指導である。

「教え指導する」という、教師の明確な姿勢が見えないところに教育は成り立たない。「教師とは一体何をする人なのか」をもう一度問いただし、子ども、保護者や地域の方々に「さすが先生」と言わしめ、教師の信頼と権威を回復しようではありませんか。

「確かな学力」の向上のために

よく「教師は授業で勝負する」と言われる。言い尽くされた言葉であるが故に重みがある。今、教師の資質や能力が問われている。教科指導はもちろん児童指導、情報化社会、特別支援教育等、多種多様な資質や能力が求められている。しかし、第一は授業であり、子ども一人一人にわかる授業を行うことが大切である。そして、それが子どもとの信頼関係を構築し、ひいては保護者や地域との信頼関係にもつながる。

変化の激しいこれからの社会を生き抜くためには、単に多量の知識を記憶しているということではなく、社会に出てからも、学習によって習得した諸能力を、初めて遭遇する問題や場面において活用し、自ら学び、自ら考え判断し、問題をよりよく解決していく力をはぐくむことが大切である。

平成十四年一月に文部科学省が出した「確かな学力の向上のための二〇〇二アピール」「学びのすすめ」においても同様に捉えており、基礎・基本の確実な定着、課題を解決していく能力の育成、学ぶ意欲や学ぶ習慣化の形成、一人一人の個性や能力を伸ばす指導の工夫・改善に取り組むことを促している。

こうした社会の要請を受け止め、前任校において全校体制で取り組む学校課題を『「確かな学力」をつけるための指導法の工夫」とし、副主題を「基礎・基本の定着を目指して」と設定した。「確かな学力」とは、基礎・基本、つまり学習指導要領に基づく学習を行うことで身に付く様々な力を中核とし、課題発見能力、思考力、判断力、表現力、問題解決能力、学ぶ意欲、知識・技能、学び方などの資質・能力を備えた主体的な学びと捉えた。

基礎・基本の定着については、特に小学校での教育が以後の学習の基礎となることから、基礎的・基本的な知識と技能については、繰り返し確実に身に付けられるようにする。そこで、一人一人の子どもが基礎・基本を確実に身に付けるために、個に応じた手厚い指導が欠かせないことを教職員で共通理解して指導に取り組むようにした。そのための指導体制を担任の教員も含めて、T1・T2の授業をどの学年にも対応するように整えた。指導方法では、一斉指導のほか小集団や個別指導、繰り返し指導、また子どもたちが自力解決できるように、教師の助言だけでなく、ヒントカード、練習問題、まとめとしてコンピュータなどを取り入れて基礎・基本の定着を図ってきた。指導案作成では、低・中・高別ブロックごとに原案を検討し、その中に本単元で定着したい観点ごとの基礎・基本と単元のプレテストによる実態把握、課題解明のためのブロック研究項目に対する手立て（場面・方法）を位置づけ、本時では、T1・T2の役割を明確にし、研究授業を通して検証することにした。

全体会では、一人一人の子どもたちが基礎・基本を確実に習得しているかなど、学習状況を把握し、常に「確かな学力」の向上を目指しながら、学習指導法の工夫・改善に取り組んだ。評価として、三学期に全学年のテストを実施し、昨年度と比較して学力が徐々に向上してきていることを確認することができた。

「確かな学力」の向上には、全校体制で授業の質を高める必要があると思う。教育改革真っ只中だからこそ、「教師は授業で勝負する」という言葉の重みを改めて感じとり、初任のときの気持ちを忘れることなく、信念と「情熱」「熱意」「熱心」等をもって指導に当たることが大切ではないだろうか。

子どもたちから学んだこと

黒板に「宿題  」と描いた最初の日、子どもたちは「？」と言って、そのうち「梨だ。」「宿題なしだ！」と大騒ぎをしていたのも、つい昨日のことのようです。

いくつかの学校を経験し、ある町の小学校に赴任したときのこと。私の担任は四年生。一年生から三年生まで編制替えのないクラスでした。私は、やんちゃなこのクラスの担任として、すんなり受け入れられるか不安でした。考えてみれば、保護者にとっては、まったく見ず知らずの他人である私に、感性豊かな子どもたちを全面的に託すことがとても不安であることには違いないのです。そんな不安をお互いに抱えた最初の家庭訪問の時には、地理の不安な私を、車で先導してくださった保護者の方もいて、感謝の気持ちでいっぱいになりました。のどかな田園地帯を見ると、今でもその時の親切な保護者の様子が目に浮かびます。子どもたちを「少しでも良くしていきたい。」という気持ちは、日々膨らんでいきました。

私は、まず、子どもたちに十分身に付いていることは何か、欠けていることは何かと思い悩みました。さて、どこから手をつけようかと迷った挙句、手始めに、国語の教材「ガオーツ」の学習計画作りをしました。グループに分かれ、各段落の区切りを見つけ、時間をかけた話し合いを多く取りいれました。また、作成している様子を写真に撮り、教室内に掲示しました。出来上がった学習計画を発表し合い、各グループの相違に気づかせる活動もしました。

担任して一カ月が経ったところから、「興味のあることはやめない」という姿で学習をし続ける子どもたちのよさに気づきました。私は「授業の手抜きはしない」、「授業中の子どもたちに手を抜かせない」ことを心に誓いました。

しかし、あるとき「リレーをしましょう。」と言うと、全員一斉に裸足になって、走る順番を口々に主張し始めました。その様子は、教室で授業に熱中し始めた子どもたちとは思えませんでした。また、教室内を歩く人に、横から突然足を出し転ばせることを繰り返してしまう光景にも唖然としました。道徳で「粘り強く学習することや「思いやり」について指導しても、建前であって本音ではないことを見事に私につきつけたのです。そうしたことも、日々の学習の中で身に付けさせなければ定着していかないことに、いやというほど気づかされました。

卒業までの三年間で、特に印象に残るのは、理科「水の中の小さな生きものたち」の授業でした。学校中を回ってプールの水や用水路の水を集めるところから始めました。微生物を顕微鏡下で見つける体験は根気のいることです。微生物を見つけた感動が大きかったのは驚きでした。あちらこちらで、「いた。いた。」という大きな声が響きました。子どもたちのよさ「興味のあることはやめない」長所と、グループ同士見つけたものを見せ合うことがあいまって、興味の連鎖が広がったのです。ミカヅキモ、ジュズモ、アオミドロ、クンショウモ、ミジンコ、ゾウリムシと、次々に見つけ出しては嬉しそうな表情を見せるのです。ボルボックスを見つけたグループは、得意満面でした。こんなことをきっかけに、私と子どもたちは、少しずつ心が通い合うようになったのです。

今でも、当時の子どもたちは、折々に成長した姿を見せてくれ、回顧話をすることがあります。当時、彼らはやんちゃだったけれど、興味と好奇心の塊であったこと、それを全身で表現していたことがしみじみと伝わってきます。

授業「ヴェロニカ」を通して

平成十八年四月、八年振りに中学校に戻ることになった。あのジオラन्दルに再会するのだと真っ先に思った。私たちを結ぶ目に見えない力を感じた。

校長も教頭も全職員が公開研究授業をする私たちの校内授業研究会で、私は十一月の自分の授業に向けて、何を教材とするか悩み続けていた。幾つもの詩や小説と向き合いながら、生徒たちに自分はどう生きるべきかを深く問わせることができるかどうかを考えていた。思案の末に選んだ教材は、遠藤周作の「ヴェロニカ」だった。担任をしていた頃、年度末の教室で読むだけで終わりにしながら（その頃の私には、この作品を授業として組立てる力がなかった）、いつかきつちりとした授業として行ってみたいと思っていた作品である。この作品を通して、自らの心情に従って生きることの気高さを感じとらせたいと思った。この作品を、中学三年生になったジオラन्दルと共に読みたいと思った。

ジオラन्दルが、先に日本に来て働いていた父から呼び寄せられ、母と姉弟と一緒にフィリピンからやってきたのは、彼が小学一年生の冬だった。日本語は全く分からず、「おはよう、こんにちは、ありがとう」だけを言うことができた。

それからの一年三カ月、彼と姉のアンジェリーヌに、毎日国語の授業になると図書室に来てもらって、日本語を教えた。私は、吾が子が言葉を覚え、言葉を口にするようになったあの懐かしい時代を思い起こしながら、言葉を発する根底にある深い信頼と愛情に満ちた世界を、図書室に作りたいと願った。揺りかごの中の赤子をあやす母のように二人と遊びながら、少しずつ言葉を増やしていく二人と共に過ごした。トランプ、カルタ、すごろく、しりとり、

懐かしい遊びの道具が、日本語の言葉と文字と数の教材として役立った。特に、幼いジオラन्दルは、持ち前の好奇心と茶目っ気から誤りをものともせずしゃべりまくったので、二年生が終わるころには、クラスの子と派手に渡り合えるまでの日本語力を身に付けていった。そして今、彼は日本人以上に日本語でものを考え、日本語で自分を表現し、国語のテストで最高点を取るまでになった。しかし、その代償として失ったものはあまりにも切ない。彼は母国語を忘れ、両親特に母親と自由に会話することができない。日常語はともかく、自分の進路や生き方について親と話し合いたい年頃になっているのに、それができない辛さを彼は生きている。

私は、そのジオラन्दルと共に、人はどう生きるべきかを考えたかった。この日本社会の中で、フィリピン人として生きていく強さを身に付けてほしいと願った。どんな逆境にあっても、自らを肯定し、人を信じて生きていく力を身に付けさせたかった。「ヴェロニカ」の授業の最後に、私は、戦いのさなか敵兵を匿った内儀さんを私刑してしまった同胞が、戦後、内儀さんの銅像を建て、「あなたは我々より本当のフランス人だった。人間だった。」と言葉を刻んだ意味を問うた。二人の生徒が「反省」と答えた。次がジオラन्दルだった。彼は「尊敬」と答えた。授業が一気に収束に向かうのを感じた。授業後の感想を彼はこう書いている。「人は素晴らしい、人は美しい、と僕は思います。しかし、戦争という厳しい状況の中で、人は自分を忘れ非人道的なことをしてしまう。人が人を殺す、傷つける場面を僕は想像できません。僕は、どんな時も、いつまでも、人として優しく温かく生きていきたい。」

教師は授業を通してこそ、真に子どもとかかわれる。授業は正に生命（いのち）である。

見えない力

昭和四十年代は、塾などへ通う子が少しずつ増えてくる時代であった。期末テスト等の問題づくりでは近隣のどの塾の予想問題にもないものを出題しようと青くさいエネルギーを使いながら、私は学校と学校以外の教育機関の違いはどこにあるのだろうとぼんやり考えるようになった。

三十七年の教職生活をふり返ると、一見むだと思えるようなことからかけがえないものを感じた。学ぶことや教えることに抱くイメージは人によって大きな隔たりがある。同じことをしているようであっても、なぜこれほど違うのか。校内研究会の準備からストーブを囲んでのお茶飲み話まで、子どもの指導にまつわる多くの方との会話は私にとっての財産となっている。

自分とは相容れないという思いを抱いたり苦しさを感ずるときもあった。が、当たって砕けるというように思いで接するうちに初めに感じていたものとは全く異なるものに変わっていくことがあった。学ぶことのおおもととは自ら求める心だという考えは年々強くなっている。子どもや同僚、先輩教師や上司、考え方が似ていたり自分に都合がよかったりする場合だけでなく、異なるタイプや反発を感じるような人との話から、新しいエネルギーを引き出されるときがある。しかし、今そのときがいつなのか自らもわからない。そのような人と出会えるかどうか、これは大きな分かれ道であると思う。苦しい気持ちになっているとき、それは自分が脱皮しようとしているときであるかもしれない。

もう一つは、どれくらい子どもを信じ、その力を待んで授業を進めたかということである。

目標を高くもつこと、力のある子が満足する授業を仕組むことは学級経営にも大きく響く。その過程で子どもも相互に影響しあうところから生まれるものを侮ってはならない。どれほど力量のある教師であっても、一教師と子どもの関係のみで考えていては壁に突き当たると私は思う。総合的な学習の時間が設けられる前から、一人一人の子どもの力を引き出し、相互の響きあいをバネにして教科を発展的に学ばせていた授業があったと私は記憶している。教科書に載っている題材は同じであっても、その学習のプロセスと結果は大きく異なる。あれこそまさしく総合的な学習の目指そうとしたことではなかったか。授業は予測不可能なものを孕む生きもののようなもの、どうなるかわからないという部分を残して計画するだけの度量が要ると私は思う。それがないと、ほとんどの授業は確認にとどまり、子どもと教師で新たな発見をするという段階に進むことはないだろう。

学校の学校たる所以は、子どもが互いの力やよさを感じあうことにあり、結果的に学級や学年や学校がより高いものになること、言い換えるとその場にいる子どもと教師がより充実した時間を共有できるところにあるのではないだろうか。たとえてみれば、歌を歌うにも、一人で歌うよりはクラス全体で歌うほうが楽しく、クラスで歌うよりは学年全体のほうがずっと気分よく歌え、学年で歌うよりは学校全体で歌うほうがはるかに美しさを感じとれるようになるというようなものである。

これらのことは、なかなか見えにくい学校のよさであり力であると私は考えている。そして、普段は隠されているこの力が、これからも学校の中で温め続けられることを念じていたい。

心
の
絆

子どもに育てられて

新卒三年目に山の小さな学校で一年担任となった。その時に忘れられないA児とB児に出会った。A児は背が低く痩せていて、常に口元からよだれを垂らしていた。長い時間席に着いていられず、よく授業中トイレに行く。トイレに行くとなかなか帰って来ないので探しに行くと、池の中を棒で突いたり、砂遊びをしたりしていた。経験と指導力のない私は、こうした失敗を何度も繰り返していたが、トイレは休み時間に必ず私が連れて行くことにした。そのうち、女の子が手をつないで連れて行くお手伝いをしてくれるようになった。女の子は得意げにお姉さん振りを発揮してくれた。就学前の教育を受けていなかったA児は、自分の名前も読むことができなかった。集団生活は初めての経験であり、学習や行動は一年生には全くついていくことはできなかった。その上、思うように自分の言いたいことが表現できなかった。でも、幸いなことに、言われたことは素直に聞いてくれた。そこで、床に「Aちゃんのお家」と言って、チョークで大きなマルを書いてあげると、その中で積み木をしたり、粘土をしたりして過ごせるようになった。

大変だったのはB児だった。友達ともめると、感情を抑えきれずに、物は投げる、誰彼かまわずに体当たりする状態だった。なかでもすごかったのは給食を投げ飛ばし、窓から飛び降り、花壇の中をはいずり回ったことである。注意すると大声を出し、鉛筆を握りしめ、自分の頭に何度も突き刺した。その頃は特別支援教育も広まっていなかったが、今言うとう自傷行為のようなものであった。その上、整理整頓はできないが、鉛筆一本でもなくなると、それにこだわり、出てくるまでは大騒ぎになった。そこで、家庭訪問時にそのことを母親に話した。その

後も、何度か学校の出来事を家庭に連絡した。するとB児は必ずといっていいほど荒れたので、あまり連絡をしないことにした。その方がB児も落ち着いてきた。

クラスの子どもたちは初めのうちはびくりしていたが、こうしたことが繰り返されるうちに、どうすればB児が穏やかに過ごせるかを学んでいた。一年生だからもつと担任に甘えたいのに、自分のやりたいことを我慢して教師である私を助けてくれた。半年も過ぎる頃には「Bちゃんルール」がクラスの中にできあがっていた。そのルールには「できるだけ競争を避けること。興奮してきたら刺激するようなことは絶対に言わないこと。」等があった。幼稚園に在籍していてもB児はほとんど欠席していたので、集団生活は初めてのようなものであった。

しかし、新しい環境にも慣れ、少しずつ落ち着いて学習するようになってきた。時々興奮して感情的になっても、私が身体全体で抱きしめてあげると怒りが治まり、すうっと力が抜けて落ち着いてくるようになった。B児は理解力が高く、学習はよくでき愛らしさもあったので、こんなB児の良さを認めるかのように、クラスの子どもたちとはとてもよく面倒を見てくれ、B児を遊びの仲間に入れてくれた。子どもたちみんながB児を温かく見守ってくれた。

この年ほど子供たちに助けられたことはなかった。また、ありがたいことに未熟な担任の私でも、保護者からの苦情は全くなかった。A児・B児の指導は大変であったが、学ぶものが多かった。この時の体験はその後の指導に生かすことができた。また、この貴重な体験で、私は教師として大きく成長できたと思う。困難は自分を磨くチャンスでもあると感じたのもこの時であった。

子どもから学ぶ

今思うに、この三十数年間で、社会は著しく変化し続けている。身近なところで、白黒テレビからカラーテレビへ、固定電話が一家に一台普及するや否や、携帯電話が登場し、一人一台の様相となつている。自家用車の普及も同様である。待たなくても品物が手に入る自動販売機、四六時中営業しているコンビニエンスストアもいたるところにあり、便利になつている。

一方で、利用者が少なくなると公衆電話は撤去され、バス・電車等公共機関の乗り物も廃止されてしまう。あまり人と関わりをもたなくても、物が手に入り、時間を気にせず移動もできる。世の中、確かに快適で便利になつている。戦後の貧しい時代に育った者からすれば、今は夢のようなである。便利な環境で育った人は当たり前であり、今親となつている世代が正しくそうである。

振り返ってみると、いろいろな人と出会ってきた。ただ、今の子ども昔の子ども、言葉だけでなく「全身全霊」で表現したり、訴えたりしている。

昭和四十年代後半から、児童生徒にかかる問題が増えてきたような気がする。

昭和五十年頃、家庭の事情で他校から転入してきた子（小四女子）に出会った。二三日したら登校を渋るようになった。朝になると「お腹が痛い」「頭が痛い」と訴え、十時頃になると元気になる。児童との人間関係をつくるため、家庭訪問をし、おはじきやゲームをして遊んだ。

それ以前から、学校教育相談や心理学に関心を持っていたので、研修会等には積極的に参加していた。特に関心を高めたきっかけは、アメリカの心理学者の書いた「ロジャーズ全集」（全二十三巻）に出会ったことにある。早速買い求め、読みふけたような気がする。その中で、

特に録音記録は何回も読み直しカウンセリング技術を高めようとした。また、学校教育相談研究会で、筑波大教授の真仁田昭先生と親しく話す機会が何度かあったのも大きな励みとなった。

その子は、一学期後半から保健室登校ができ、教室まで物を届けることができるようになった。二期の始業式の日、表情にゆとりが見られたので「教室へ行こうか！」と誘ったら、「うん」とにやかな様子で返事をし、担任の後について教室に入った。クラスの子も、今まで一緒に生活していたかのように、何のわだかまりもなく受け入れてくれた。子どもたちに助けられた一瞬である。それからは「どうして日曜日は学校が休みなの？」と言い、止まっていた時間を取り戻すかのように活発に行動し、学校生活を満喫していた。体重も増え、明るく元気な子に成長した。

昭和六十年頃に出会った男の子の話。たまたま小学三年生のころ病気になった時、両親が仕事を休んで一日中そばにいて看病してくれた。そのことが大変うれしかったらしく、それから登校を渋る日が目立つようになった。その子は「病気になれば親に甘えられると思った。」と、卒業間際にこっそりと話してくれた。

教師自身が、いろいろな体験をすればするほど、人間性が豊かになり、心にゆとりが生まれ、温かみのある優しい眼差しで子どもや保護者と接することができる。また、誇りをもって子どもと接し、時には毅然とした態度で指導し、常に「子どもから学ぼうとする」態度を大切にすればするほど、信頼度が高まっていくと思う。

子どもは、いろいろなことを気付かせてくれる。

私の定期預金

私には、ボロボロになった三十冊の「生徒名簿」がある。年度毎に発行されるが、いつのまにか意識的に収集する癖がついた。この名簿を開くと、タイムマシンのように、その時代に逆戻りする。楽しかったこと……嬉しかったこと……悲しかったこと……苦しかったこと……。そして、あの子、この子……。生徒たちの顔と共に、懐かしい思い出に浸る名簿。唯一の宝物である。

「先生！正社員になりました。」と、四月五日に古巣に戻った中学校に、N男が誇らしげに、飛び込んできた。私は思わず「なに！平日なのに、なにが正社員だど？」

思い起こせば、N男は中学時代、生活態度もあまりよくなく、飽きやすく、担任は手を焼いていた生徒である。俗に言う問題児であった。が、弱い者いじめはせず、男気があり、どこことなく魅力的な男であった。ある時、廊下ですれ違いざまに「N男、二十歳になったときが勝負。楽しみにしているよ。」とひと声かけ、送り出した記憶がある。

その後、N男はA高に進学した。私も転勤したが、定期的に中学校訪問してくれるA高校の先生に、N男の入学後の様子が気がかりで、動向を尋ねると、遅刻、無断欠席、校則違反……相変わらずの生活態度とのことである。そのたびに、私の名刺の裏面に、「自覚せよ。」「約束は……。」「遊びに來い。」

「ふざけるな！」「頑張つて……。」「まわりを見ろ！」「必ず卒業しろ。」「もう少しで……。」「と記し、渡すのが習慣になっていたことを思い出した。

それがなんと今日、『有給休暇』を使い、手には今まで渡した、数枚の私の名刺を大切に持

つて……。まさに教師冥利に尽きるとは、このことである。

それというのも教師になりたての頃、せっかく先生になったのだから、「いつでも、どこでも、誰にでも、三年間に一度は、声をかけよう。」と、心に誓ったものだ。それがやっと、実を結ぼうとしているからだ。そこで私は、

一、ひと言葉の重みを

二、優しくと、厳しさの両面を

三、叱ることは大切。アフターケアはもつと大切

四、八方ふさがりをしない

五、ときには、寝食を共に

を、心にかけてきた。

そして、学校は生徒が主人公。「おおらかにして、厳しく」をモットーに、アンテナを高く、足で稼ぎ、いつでも「生徒」を信じる心で接してきた。

今もって残念なのは、平成元年から七年まで、行政に出向し、ポツカリと穴が空いてしまっていることだ。

これからまた、卒業生が訪れたときは、この古い名簿を取り出して、本人はもとより、同級生の動向を聞いて、一喜一憂するも、また楽し。ただ今の預金高は六千四百二十七円（名）也。これが私の定期預金であり、貴重な財産である。

学級通信を日刊で発行していたころ

昭和五十年代の後半（校内暴力や荒れる中学生という言葉が世間を騒がせたころ）、私は現任校で学級担任をしていた。当時、同学年を組んでいたA先生（私にとって良きライバル的な存在だった）の研究レポートに「一日に何人の子と関われたか」という問いかけがあり、その言葉に私の中で何かが弾けて、それまでの生徒との関わり方が「一喝」された思いがしたのを覚えている。

そのころである。四月の始業式の日、そのA氏とお互いに同時に「やりますか。」と作成してきた原稿を見せ合い、その日から学級通信を日刊で発行し始めた。二クラス分を合わせてB4一枚に印刷し、B5片面刷りで発行する。なら毎日続くだろう。出すなら毎日。あくまで「日刊」にこだわりたい。

生徒たちとの日々の足跡を記しながらクラスの結束を促し、やがて「学級世論」を形成する。それを基本方針にした。その日のできごとや行事、授業、係活動、仲間とのこと、また家庭学習や生活態度など諸々のこと（その時々のはたはた）を普段の話し言葉で記していった。一人一人をよく見る。意識して一人一人と関わっていく。そうしないと中身のある記事は書けない。ワープロが登場する少し前の何ごとも手書きの時代で、製図用ペン（0.5mm～0.1mm）でファックス用原稿原紙の枠目を埋めていく。殆どが帰宅後の作業となる。したがって毎晩遅くまで書齋にこもらなくてはならなかった。時には朝食のパンをくわえながら食卓で原稿を書いた。でも楽しくて仕方なかった。通信を読む生徒たちの：ウンウンとうなずいて、エーつとどよめいて、時々クスクス笑って：が楽しみで、それを思い浮かべてわくわくしながら書いていた。

修学旅行でも発行した。バスの中で、旅館で、みんなびっくりして「スゲエ、どこで書いたんだ先生は。」（事前に三日分作成して持っていた。）また長期出張の時は、例えば筑波から毎日ハガキの通信を投函した。例えば海外で書きためたものを帰国後まとめて印刷、配布した。百号や二百号を達成した時は、教室中が「わっしょい！」の気分になった。

とはいっても、間に合わなくて慌てて帰りの学活に食い込んで印刷していたこともあって、そんな時には「学級通信を出すよりも、一分でも長く生徒たちに関わることの方が教師の本筋ではないか。」（もつともである）と、校長先生からきつく叱られた苦い経験も何度かあった。

結局、この学校を転勤するまで五年（A氏とは三年）続けた。その間、保護者の方々から『先生からの愛の贈りもの』と表紙を付けて大切に綴じています。』とか「毎日子どもが帰るのを楽しみに待っています。子どもが見せない時は、通信はどうしたのって催促しています。」など、うれしい言葉が次々届いた。そのころは「先生が担任でよかった」という生徒たちの声が聞きたくて、その顔が見たくての一心だったような気がする。私の受け持ったクラスには非行傾向の子も不登校の生徒もいたし、仲間割れやいじめもあった。しかし生徒たちは皆、一体感や所属感を、またやっていいこと悪いことの価値観が染み込んだ雰囲気（「学級世論」というべきもの）をクラスに感じていたことと思う。

学級通信を日刊で発行して、何より生徒や保護者との距離が縮まっていくのを感じた。そして「全体に厳しく、個には優しく」という生徒との関わり方、「生徒におもねず叱って諭せること、好かれるよりも尊敬されること」が大事であるという教師としての在り方を学んだのもこのころだったと思う。

子どもは担任を通り過ぎていく存在

教員になりたてのころ、「所詮子どもは、担任を通り過ぎていく存在だよ。」と先輩教師から言われた。そんなものなんだと妙に納得してしまっていた。でも今はそれは違うとはっきり言える。新卒で小学校に赴任し五年が過ぎ、その後の三年間は四・五・六年と忘れられない子どもたちを持ち上がった。この子どもたちと共に私自身が成長できたとは今は感謝の気持ちでいっぱいである。

昭和五十二年、小学校学習指導要領が改訂になり、社会科では特に歴史分野において今までの通史的な扱いは中学校に委ね、その時代の代表的な人物や文化遺産を中心に時代の特色をつかませるというような扱いに変わった。小学校の社会科の教員がよく使った言葉、「歴史を通史ではなく団子（中心となるもの）と串（年表）の関係で学習する」というものである。それは今でも小学校歴史学習の主流になっている。そんな中、勤務校は県南社会科大会の授業研究校になり、五十三年に公開発表が決まった。わたしはこの子たちと共に、五年生の時から一年半かけて、社会科を中心に学び方を学ぶ学習に取り組んだ。提案授業の単元には明治時代を選び、幕末期と維新时期と国会開設期を一括りにし、先人が時代をどう捉え、どうしたかったか、その思いや願い、生き様に迫りながら時代を大きく捉えて学習させたいと考えた。明治期は時代を通して追究できる特定の人物を選択することは難しいとされていたが、悩んだ末あえて西郷・大久保・伊藤などの群像としてでなく、板垣退助を選んだ。学習の方法としては息の長い発言ができるようにと、筑波大や宇大附属小などの素晴らしい先輩の授業を録音してきては、学会の時間に自分たちの発言内容との違いを分析させ、個々人の技能向上に努めた。これが、私

とこの子どもたちとの結びつきの一つになった。この子どもと共に築き上げた提案授業が、私にとって今でも唯一忘れられない授業になっている。

卒業が近づいたころ、この子どもたちが、突然、卒業式がすんだらみなでどこかに行こうと言い出した。そんなことは許されるはずがないと高をくくっていたが、子どもたちは校長や保護者の了解を取り、計画も自分たちでやると言ってきた。わたしは校長がよく了解してくれたなと感謝しながらも、当時溪流釣りで行った、日光市の「寂光の滝」を目的地に選んだ。当日は、先頭を私が、しんがり在家内が務めた。途中神橋のところで「日光の恩人」といわれた板垣退助の像を見せ、心に残る卒業旅行となった。中学校一年生のときには栃木市内の錦着山まで、中二の終わりには、電車を利用して湯島天神まで、そして、高校二年生の時には家内の実家近くの今市市（現日光市）の鬼怒川河川敷グラウンドを借りて、一泊二日のキャンプを張った。全て少しずつ成長した子どもたちの計画によるものであった。

現在彼等は四十一歳になる。今では二年に一度、思い出の十一月に我が家に二十人前後の大人が集まる。家内に迷惑をかけないようにと食材や飲み物持参で遠くは横浜や福島からやってくる。五年生のとき「先生なんか大嫌い。何もわかってくれない。」と日記に書いた子が、高校三年になって兄の家庭内暴力について打ち明けてくれたときなど、彼等が成長と共に大いに悩みながら生きていることを、その折々に感じ、自分の未熟さを覚えることが多い。私だけでなく家内や息子たちも、お付き合いいただいているという気持ち強い。今では教えられ、助けられているのである。「子どもはただ通り過ぎていく存在」ではない。

出会いの中で

「お久しぶりでース。今日ねー、先生に話したいコトあつてきたんだけど……。先生いないカラまたくるね。あたしねえ、〇〇ではたらいっているんだあー、バイトの人みんないい人だよ。それぢやまた。」夏休みも終わり近く、暑さに心身共にすっかり打ちのめされかけて、久しぶりに出勤した職員室の机上に、こんな置手紙がありました。文中、文末には、ハートマークや、メールの絵文字がたくさん散りばめられていて、なんとも楽しい置手紙。思わず笑顔になり、その子思い出し、中学生の時は、いろいろあつたけれども、彼女なりに明るく生きているのではないかと、改めて子どものたくましさに感服することしきりでした。

彼女は自分の置かれた複雑な家庭状況をあつからかーんと語ってしまうことで自分を保っていました。時々彼女なりに、自分の置かれた状況の不本意さを、顔で、態度で、表して「むかつく」と言つて保健室に来ていました。そして、「あのね」と話を始めると、止まるところをしない。それを私はただひたすら「うーん、そうなんだあー。」とだけ聞いている。こういうときはあえて何も言わないで聞くことに徹することになっている。話すだけ話すと、「けど、まあいいかあー。」と言わんばかりに、自分の中で言い聞かせる時を待ち、「ああー、スッキリした。じゃ教室に行つてくる。」と今までのあの憤りは、いったいなんだつたのとあつけにとられていてる私を置き去りにして、教室に戻つていつてしまふ。

その一挙手一投足を掛け値なしで受け止めてくれる大人が居る、そのことだけで、自分の力をバネにして前を向いて生きてゆけるのだと思いました。そんな場、そして人が、保健室という場所であり、養護教諭という存在であればと思いました。

自分が特に変わつていったのは、小学校の勤務から、中学校の勤務に変わったところからでした。勤務した中学校は、まだシンナーとか喫煙が、一部の反社会的な生徒に見られていました。シンナーを止めることが出来ずにいる男子生徒が、保健室へ来て、施設での暮らしを語り、「親に見捨てられたと思つていたし、寂しかったし、こんなことでもして目立つしかなかったし……。泣きながら訴える様は、本当に「幼子」のようでした。自分の思いを言葉ではなく、泣くという方法で訴えてくる中学生、私にとっては驚きでした。

不登校の生徒も、どうかしよう、どうかしてあげようと、教師である自分が迫れば迫るほど、生徒も私も生きにくくなっていくのが解りました。私は考えを改めました。教師である前に、一番身近にいる普通の大人でありたいと。

育て直しのように、中学生を背負つたり、ダンボールの家を作つて退行を手伝つてみたり……。多くの生徒との出会いの中で、自分が変わらざるを得なかったというより、子どもたちが私を変えてくれたのでした。

多面的な自己研修を積極的に受けて、価値観を多く持つとともに、転換をはかる必要性を教えてくれたのも子どもたちとの出会いだったのです。

「私は、誰かに尊重され、大切に思われている」という実感を、より多くの生徒が持てるような、そして、卒業して何度でも訪れてみたいと思えるような保健室であり、養護教諭であり続けることを願っています。

担任の力

ここ十年、毎春秋になると、我が家を訪れる教え子がいる。来るときは自宅で採れた秋の味覚の栗を必ず持つてくる。

その子の名はY子という。Y子を初めて担任したのは、昭和五十八年の四月。この年は、東京デイズニールランドがオープンし、日本海中部地震の津波で遠足の学童ら百四人が犠牲になった年でもある。私は三十五歳、教員として脂がのり、教育への情熱が真つ盛りな時だった。

Y子は母子家庭、母親は病弱である。お世辞にも楽な暮らしとはいえない。少し小太りでやさしさもあるが、それをはるかに気の強さが上回っていた。わんぱくの男の子にからかわれ、口げんかが続いているうちに、きかない女の子に育っていた。そして、いつの間にか、からかわれる対象になっていた。小学校の先生から、「少々やかいですよ。」と聞いてはいたが、案の定、トラブルには事欠かなかった。休み時間は男の子と口げんか。教室でY子が近づくところと離れる。Y子が座った椅子は誰も座らない。並ぶときは間隔を空けて整列する。あぐくの果てに、分けた給食を食べない生徒まで現れた。

四月早々、さすがに私も頭を抱えてしまった。この問題は時間がかかるとは承知しながらも、早くどうにかしなくては、という気持ちであせったことは確かである。学年主任や他の学級担任に相談し、連携をとりながら協力や支援をたくさん受けた。また、学級のまとまりの大切さや、友達との接し方について、何度も何度も学級で話し合った。時には私の生き方を交えて、人との付き合い方や関わり方についても繰り返し指導した。

Y子の話を聞き、慰めたり、言つて聞かせたり、自分を見つめさせたり、そんな日が続いた。

ある時は悔し涙を浮かべ、ある時は興奮して大声を出す。でも、私と話す時はごく普通の十三歳の女の子である。時間とともに指導の手応えが少しずつ表れ、ホッとできる時間が増えた。しばらくして二人で約束した。私がY子の味方になること、つらくても学校は休まないことである。先はまだ長かった。それは私が卒業まで面倒を見ることになっていたからである。

しかし、三年間はまたたく間に過ぎた。進路について母親に相談すると「先生にお任せします。」の一言であった。Y子と話し合った結果、昼間は工場で働き、夜間に高校へ通う二部制の高校に進学した。しかし、再び試験が待っていた。全寮制であり、そこには苦手な人間関係があった。入学して一ヵ月、夜遅くY子から電話あった。早速電話に出ると、「高校をやめたい、寮はいやだ。」と泣いて言った。数分話した後、「そんなにいやなら帰って来い。」と応えた。その時は悩んだが、今は正しい判断だったと思っている。その後、地元に戻ってきて結婚し、現在は幸せな生活を送っている。

昔から学校には、からかいや、ふざけっこはつきものである。大切なのは、担任が心を開いて子どもの話を聞き、言つて聞かせることである。百回言つてだめなら、百一回言う。これが基本であり、担任の生き方や何げない言葉が子どもの心を動かすのである。さらに、子どもからの信頼は、担任の人柄と指導力がものをいう。

とは言つても、担任一人の力には限界がある。あまり背伸びをせず、常に周囲の協力や支援を受けることを忘れてはならない。

今年の秋も、教え子に会えることを楽しみにしている。

使
命
感

これからの学校事務

私が学校事務職員として採用された昭和四十年代前半は、社会全体の時間が実にゆつくり流れていたように思います。学校も同じで、子どもたちも伸び伸びと学校生活を送っていました。

戦後日本の高度経済成長そして情報化は、ガリ版・謄写版・そろばんの時代から、コンピュータをはじめコピー機やファックスといったＩＴ機器の発展普及へと、私たち学校事務職員の仕事を大きく変えてきました。

しかし、新しい事務機器が導入されたにもかかわらず、学校事務職員の仕事は、昔より時間的余裕も無くなり、質・量とも増加しているのが現実です。

中央教育審議会の答申や教育基本法・教育三法の改正により、学校の組織運営体制や指導体制についても変わりつつあります。

また、教職員の評価制度や学校評価の導入・公務員制度の改革と、教育界も大きく変わろうとしています。これらの改正等により、事務職員に求められているのは、教員の事務・業務の軽減化及び効率的・効果的な事務処理と学校経営への関わりではないでしょうか。学校裁量の拡大に伴う事務量・予算の執行等への関わりと対応、また、学校事務職員として、教育活動への支援と、校長を補佐し学校経営に関わりながら教育活動の推進にどれだけ貢献できるかが問われています。

事務職員が共同で複数の学校の事務を効果的・効率的に実施する、共同実施組織の全体的な導入と組織化により、事務処理体制の確立と強化が図られ、教育活動や学校経営を積極的に支援していくことが可能になると考えられます。

平成十九年三月に、「教員の事務負担を軽減するため、事務職員が学校運営に積極的に関わり、事務の共同実施の促進と組織の制度整備を行うなど、事務処理体制の充実を図っていくことが必要」と、中央教育審議会が答申しています。

しかし、まだＩＴ機器を使った文書処理、会計処理、給与旅費の入力登録票の作成、定型文書のデータ化、パソコン事務処理ソフトの共有化など、今できるものから実施しているのが現状です。しかし、現在求められているのは、もう一歩踏み込んだ共同実施であると思います。それには、共同実施の単位となる地域へのバランスのとれた事務職員配置とともに、地域のリーダーへの権限と処遇等も考えていただかなければならないと感じています。

少子高齢化、情報化社会、多様な価値観の社会の中、私たちは、学校事務職員の職務を通じて、様々な教育支援を行うことにより、子どもたちの健やかな成長と保護者や地域住民のニーズに応えていかなければならないと思います。たとえば、学校事務職員として教育業務・学校行事等に積極的に関わり、教育予算の有効活用・重点配分等、教育支援を行うことなどが挙げられます。このことにより、仕事に対する責任と充実感とともに、学校経営の一端を担っていることが、さらに自覚できるようになると思います。

教育内容の理解・企画立案能力・説明責任能力・事務処理能力など事務職員としての職務遂行能力や、マネジメント能力の向上と、コミュニケーション能力を養うなど、自己研鑽に努め、校長の基本的考え、教育方針等を理解し、学校経営に貢献することが求められていると思います。

不易なものを追い求め続けて

本校の職員の靴箱の出入り口に「履物を揃えろ」と心も揃う／心が揃うと履物も揃う／脱ぐときに揃えておくと履くときに心が乱れない／誰かが乱しておいたら黙って揃えておいてあげよう／そうすればきっと世界中の人の心も揃うでしょう」という貼り紙が掲示されている。それを読むたびに、教育哲学者の森信三先生の教えを思い出す。森先生のしつけの三大原則は「①挨拶ができる②『はい』とはっきり返事ができる③履物を脱いだら必ず揃える」である。これらは全て「我をとらなければできない」と言う。①は、何事に対しても自分から意を決して挨拶する毎日の実践の積み重ねを通して、自主的・主体的な心の育成を願うものである。②は、

「はい」と返事をしたとき心が素直になり、人の話が心に響く。即ち「私意を払って謙虚に聞く」心の育成を願うものである。③は、しまりのある子どもの育成を願うもので、これが一番難しく大人でもなかなかできないことである。だから、誰かが先程の貼り紙をしたのであろう。

「三つ心 六つ躰 九つ言葉 十二文 十五理」これは、三歳までに素直な心を、六歳になるとその振る舞いに節度をもたせ、九歳では人様の前でも恥ずかしくない言葉遣いを覚えさせ、十二歳ではきちんとした文章が書けるようにさせ、十五歳にもなると物の道理がわかるようにしなければならぬという教えであると聞いたことがある。この大事な躰や基本的な生活習慣を根付かせることは容易ではないが、その一つの方法として、「賛嘆」をすすめている。賛嘆とは、広辞苑によると「ふかく感心してほめること」とある。

人は誰でも「関心をもたれたい」「理解されたい」「認められたい」「信頼されたい」といったような欲求があるといわれる。このことは親や大人に頼っている子どもにとってはなおさら

である。このような欲求を満たしてやるのが、子どものやる気を喚起し、何事にも根気強く取り組ませることにつながる。子どもは足りないところ、よくないところ「はすぐに目に付くが、「よいところ」は見つける努力をしなければなかなか見えない。漠然と見ていては悪いところしか目に入らず、「注意する言葉」「叱る言葉」しか出てこないことになる。見つける努力をして、よい面が見つかる気持ちも和らぎ、深く共感した心からの「ほめる・励ます豊かな言葉」が出てくることもある。子どもは認められ、ほめられ、励まされて、満足感を味わい責任感が養われ、一層やる気を起こすようになる。ほめられた方向に子どもは育っていくといわれるように、「できないことを叱るよりも、できたことをほめよ」が子育ての原点ではないかと、改めて再認識している昨今である。

これまで、学校で子どもたちと元氣な挨拶を交わすたびに、できるだけ賛嘆の握手をするように心がけている。握手した子どものこの手が、やがて世界を動かす手となるわけである。また、子どもは一冊の本であるといわれている。どんな本よりも読みごたえのある本である。だから、直に子どもという本から何か大切なものを読み取り、不易なものをその本に書き込んでいかねばならない。環境が人をつくるといわれるように、教師は学校において子どもにとって最も身近な人的環境である。子どもは大人の鏡である。子どもは大人の言うようには育たず、子どもの言動が次第に担任の言動に似てくることから、大人のしているように育っていくものである。まさしく教育は人なりである。今、「自立と共生ができる子ども」を目指して、教育目標の具現化に取り組んでいる最中である。

「変わる」「変わらないう」

「教育は国家百年の計」と言われてきた。人づくりは「まず教育から」と、国家は、長期的スタンスに立って、教育（＝学校）の有り様を探ってきた。しかし、いつの頃からか、守られてきた学校にも、新たな教育理念が、次々と導入されるようになった。今、振り返ってみると、「あの時」が、変わり目だったのかなと思う出来事がある。

それは、教師として充実期を迎えていた四十代半ばの、一九九二年九月のことであった。学校でもこんなことが起こるのか！と、その時の思いは、今でも鮮明に覚えている。月一回ではあったが、年度途中から「学校週五日制」が実施されるようになったのである。「学校の制度が変わる」このようなことは、当時の私にとって、想像することもできなかったことである。

それ以来、少子化に連動するかのように、学校も、これまで馴染まなかった「変化」の波にさらされるようになってきた。「学校週五日制」が完全実施となった二〇〇二年には、生活科をベースとした「総合的な学習の時間」が創設された。その後も、「学校評議員制度」「学校評価」「教職員評価制度」などが導入され、「説明責任」という考え方も入ってきた。最近では、子どもの「安全確保」という視点からの学校経営が重要になってきている。

こうした、さまざまな「変化」を通して感じたことは、これからの学校は、従来の手法を超えた「知恵」の集積が必要になってきているということである。また、教師に求められる資質としては、「教師だから許す」ではなく「教師だから許さない」という視線を受け止めながら、「変化」を逆手に取るようなくまじさを身に付けていくことではないかと思う。

しかし一方では、どんな時代になろうとも、子どもの前に立つ教師である限り、持ち続けなければならない「不易」な領域があることも確かなことである。「それは何か？」と問われたなら、最終的には、「子ども理解」に行き着いてしまう。

学校とは、子ども一人一人が、生涯にわたって学び続けるための「力」を身に付けていく所である。そこで、直接子どもと向き合う教師には、子どもを見るさまざまな視点が必要になってくる。なぜなら、学校には、子どもが伸びるチャンスがたくさんあるからである。もし教師が、それらを見逃してしまったとしたら、子どもの伸びる芽は摘まれてしまうことになる。だから、教師は子どもを見るさまざまな視点を備えていなければならないのである。

大人である教師も、子ども時代を経ているわけだが、いつの間にか、「子どもの心」を見失っていく傾向がある。昆虫を追い求め野山を駆けめぐったことや、時間を忘れ、本の世界に没頭したことなど、子ども時代の「震えるような感動」が思い起こせなくなったとき、真の「子ども理解」は難しくなってくるのではないだろうか。「大人げない」と言われても、教師としての資質は、いつまでも「子どもの心」を持ち続けることであり、その努力を怠ってはいけないのである。

最後に、この仕事を通して、これまでに数千人という子どもたちに接してきたことになる。なぜ、こんなに多くの子どもたちと関わることができたのか……それは、月並みだが、子どもが好きだったからに他ならない。

生涯一教師

初任校の教頭先生に、その当時の流行語「金の卵」と言われて、昭和四十五年四月に新米教師となって、いよいよ三十八年目になりました。

まず、教職員十三名の一員になって、教師の仕事が多種多様にわたっていることを知り、驚きました。今のように各種の加配教員の配置もなく、新採の私は自分の仕事に追われ、放課後、学年主任が子どもに勉強を教えている傍らで、学習指導や生活指導、学級事務について指導を受けました。また、宿直の夜、先輩から若い頃の苦労話や誇りを持って勤務する心構えを聴いて、改めて教師の仕事の意義あることを学びました。

さて、教師の自分である教科指導では、学習指導要領を隅々まで読んで、下線を引き、大事なところはノートに写し取ったことも今では懐かしく思います。特に、子どもたちの個人差の大きい算数科の授業は、豆テストやワークシートを作ったり、自作教具を作ったりして基礎基本の定着を図ることに努めました。その当時は、市販の問題や教材・教具も少なく、自分で何とかしなくてはなりませんでした。そこで、週に一度の宿直は、問題作りや自作教具作り、日々の授業の略案作り等を行う貴重な時間でした。新採の私にとつて大変ありがたい時間で、先輩の分まで宿直をさせてもらいました。

その後、中学校に異動しました。校内の研究授業後、ある先輩から中学校教師は、「教科指導だけはダメ、部活指導だけでもダメ。」と言われ、『文武両道』を目指すが教師本来の姿である。」と思いました。まだその当時は、心のすさんだ生徒が各クラスにいましたので、生徒指導がきちんとできないと学習指導にも影響しました。

だから、教師と生徒の人間関係を円滑にし、生徒個々の能力差を把握した授業を展開するために指導方法の研究は必須でした。時代の要求を踏まえて行われる学習指導要領の改訂は、私自身の指導のマンネリ化を反省させ、新たな気持ちで、授業づくりに取り組ませてくれました。

また、強い心づくり、堅い仲間づくり、技術の習得の三本柱を部活動の指導方針と定めて、生徒の個性を認め、伸ばすために全力投球しました。この部活動では、生徒と真正面向き合い、生徒のよさを確認し、教科指導や生活指導に生かすための大切な教育活動であると確信していました。卒業後、教え子の結婚式に招かれ、当時の教え子と会い、厳しかった練習や大会の思い出を話しながら、教え子の成長を見て、教師であることを誇りに思い、教師冥利に尽きると強く感じ幸せに思いました。私の指導方針を信頼して、我が子だけでなく、部員一人一人を支えてくれた保護者の皆さんの協力は、選手たちにもやる気を起こさせ、部活動を運営する上で大きな力になったことを今でも感謝しています。

現在、大きな教育改革となった「学校週五日制」のゆとりの中で、「生きる力」を育む教育に対して課題はたくさんありますが、児童生徒が真剣に将来を考え、夢に向かって生きていくために、今、学校教育に求められることは、教師自身が時代の流れを柔軟に受け止め、指導力を高めることであると思います。

後輩の皆さんには、いつの時代でも教師の在り方として、「文武両道」を追求し、教師自身も豊かな心をもつ「生涯一教師」を目指して、不易と流行を見極め、児童生徒を中心に据えた学校教育を支えてほしいと思います。

心の交流 ― 内面理解を重視して ―

「学校は、学級経営が基盤である」と、子どもの目線にあった学級経営の重要性を先輩から教えていただいた。子どもは誰でも、認められたい、充実感を味わいたい、よい結果を得たいと願わないわけではない。学級経営は、教科指導・児童指導と多岐にわたり、その時、その場で意図的・計画的に働きかけなければならない。

休み時間になると、担任の机のまわりに子どもたちが集まってくる。若い時にはなおさらである。しかも、授業中とは別の顔である。先生と話したい、先生に話したい。いわゆる「先生、あのね。」である。そして会話が弾み、子どもの心の一端を見るチャンスとして大切なことがある。自分の自慢や困ったこと、友達のこと、家でのごとなど、コミュニケーションが図れると共に貴重な情報源であった。何も話せない子どもからも目を離せない。子どもは一人一人いろいろな環境で育っている。特に、最近はその変化と共に複雑である。

このような中での学習指導。「知識・理解」「技能」などの目標をもって指導にあたる。しかし、子どもたちの態度や姿勢は、その時々によって心理的・体力的に違いが出る。教科目標の達成を通して満足感を味わわせるには、子ども一人一人にあった働きかけが欠かせない。「先生、あのね。」から得た情報を考えつつ、励ましたり指名したりして指導に当たることが大切で、教科目標と同時に心の安定を図る目標が必要である。（超教科目標）

子どもの内面を理解し、指導内容が「分かる」「できる」「さらに」「やったあ」、その上「おもしろいなあ」という気持ちを味わわせることが重要である。

また、楽しく意欲的な学校生活へ向けて、子どもの長所を伸ばし、自信を持たせるよう働き

かけを継続してきた。日記指導による励まし、運動能力面の伸長、理科研究への意欲の喚起、絵画や書道の能力開発などの支援をしてきた。

長い教師生活では、勤務校や年齢・地域性などによって立場が変わってくる。いずれにしても組織の一員には変わりはない。担任として、教科主任として、渉外担当として、何をどうするか迷う時もあった。そんな時、先輩や同僚からのアドバイスや励ましは、解決と共に自信を持つことにつながった。組織力は個の力量を大きくするものと実感している。

教職員の現状は、という忙しい。仕事はパソコンがないとはじまらない。教職員同士の「言葉のふれあい」が少なくなりつつある昨今、教育現場だけは、人と人とのかわりを増幅させていきたいと願っている。私たちは、教育に関する専門家である。一個人としての自分を磨き、社会人としても教師としても幅広い人格形成に努めたい。「教師の常識、社会の非常識」にならないように。

教師は、時間を超えて子どもへの影響が大である。担任の時は、その子どもへの思いを「贈る言葉」として、校長である今は、「路傍の石」の名言を揮毫して贈っている。家に掲げたと聞いた時は何となく嬉しい。すでに、受け持った子どもは実社会で活躍している。欧州の環境先進国で環境情報センター代表として活躍している教え子は、小学生時代に「外国で活躍したい」と語っていた夢を実現した一人である。小中学生時代に将来の夢を持たせる意義は大きい。

二十一世紀を担う子どもたちに、「本気で、元気に、根気強く」そして「やる気と勇氣」をもち「活気ある」子どもに、学校に、と啓発しているところである。

進路選択力

県立高校合格発表日。ある進学校を受験した、学級の男子生徒が不合格となった。担任としては、予想もしない結果に戸惑いながら、家庭訪問をした。母親からは「朝、慌てる様子もなく、合格発表を見に出かけることもなかった。」とのこと。母親は、不合格に加え、子どもの態度から「どうということなの……。」と、涙ながらに不信感を募らせていた。担任としては、母親に納得のいく説明が出来ないことに情けなさを感じ、「申し訳ありません。」と謝りながら、母親と同じような気持ちになっていた。

日ごろの学習や学校生活での取り組みに何ら不自然さもなく、友達と共に課題等に取り組み姿も見られた。担任としては、このまま目標とする高校を目指して、学習に取り組んでほしいと強い期待感を持って見つめていた。

彼は、母親の前で何も答えてくれない。しばらくして外で、話を聞くことにした。なかなか要領よく話が進まない。沈黙の時間が流れた。「担任としては、不合格になったことが信じられない。」「何かあったのか。」と尋ねた。彼は、「好きな教科の勉強がしたい。」とポツリと言った。主に数学を中心とする教科であることは、推察できた。確かに上級学校の教科書の学習内容に興味を示しながら、自習する姿が思い浮かべられた。

彼は、興味のある教科への学習意欲が高く、その意志を貫こうとし、周囲に迷惑をかけないように授業や受験学習への取り組みをしてきたことも分かった。受験した入試科目の得点を調整しながら、自ら不合格になったのである。級友が何の疑問も抱かず進む高校生活に興味を持

てなかったのかもしれない。

大検を経て大学を卒業、仕事に就いた彼と会う機会があったとき、「部下職員とコミュニケーションをとることが苦手で、困っています。」と漏らしたことがある。

自ら拒否した高校生活は、そのような彼の苦手とするところを補ってくれる機会や、人との交流、様々な体験を通して、多くのことが学べる期間ではなかったかと密かに思った。

今も彼とは年賀状などのやり取りが続いている。最近結婚の報告があり、さっそくお祝いの言葉を送った。いつの日か、彼とまた会える機会も来るかもしれないが、彼の進路選択について触れるつもりはない。

彼は、自らの意志を貫き決断、進路を決めた。その意志の強さ、実行力は認めながらも、真の進路選択力と言えるかは疑問である。担任としては、彼が進路選択までに悩み抜いたと思われる時期に、内面に触れる関わりが持てなかったことを悔やんでいる。

中学校卒業後の進路選択、生き方は、生徒にとって大きな問題である。どの生徒も必ず個々の悩みを抱えていることを認識し、具体的に、継続的な関わりを持ち、考えや思いをよりよく理解してあげることがいかに大切であるかを教えられた思いでいる。

生徒一人一人が自らの生き方を考え、希望を持って、進路を選択、決定できる力を培っていくことが中学時代の大きな目標であり、それを支え、育てていくことが、担任・教師の役割、使命でもあると考えている。

新たなことに挑戦を

もう二十年ぐらい前になるでしょうか。ある先輩が「仕事は椅子がする」と言って上司から叱られたことを思い出します。先輩は「校長、教頭、指導主事など、その立場になれば、そのポストに座っている人が言ったというだけで皆さんが動いてくれる」という意味で話されたのでしょうか。しかし上司は、「仕事というものは、その人がしつかりとした考えと熱意を持ってやらなければならないもの」と言いたかったのです。このことを聞いて、自分の考えをしつかり持って学校経営にあたることの大切さを学びました。

その後、実際に学校経営を任される立場になって心がけたことは、自分の考えを持って新たなことに積極的に取り組んでみることでした。

その一つとして、国際交流を中心とした国際理解教育に取り組んだことがあります。これからの社会では、世界の人たちと仲良く生きていくことが必要なこと、日本と世界がどのようなつながりや関係を持っているのか、ということを経験したいと思ったからです。

一年生は、東京に行って、日本語学校に学んでいる各国の学生と一緒に、見学などをして交流しました。二年生は、宿泊で東京に行きました。初日の午前は国際協力機構、日本ユニセフ協会、国際連合（広報センター）、日本貿易振興会、日本外国特派員協会などに行き、日本が世界の中でどのような役割を果たそうとしているのか学びました。午後は日本にあるオーストラリア、スペイン、ブラジル、スウェーデン、サウジアラビア、韓国など各国の大使館に行き、日本との貿易の状況や文化交流の様子などを学びました。二日目は、日本語学校へ行って一緒に授業を受けたり、日本の遊びを教えたりして交流しました。また、都内の名所を、互いの国

のことを話しながら一緒に見学しました。三年生は、京都での修学旅行で、大学の留学生や日本語学校の学生と丸一日行動を共にして、英語を使いながら交流しました。学生たちの国の料理と一緒に作り、一緒に食べながら交流したこともあります。

日本語学校や留学生との交流ばかりでなく、アメリカンスクールの中学生との交流も検討しました。交渉がうまくいきそうなのが何度かありましたが、社会情勢等の理由で実現できず国際交流の難しさを感じました。

この行事を通して学んだことは、新しい事業を立ち上げる場合とてつもないエネルギーが必要であったこと、少しくらいの困難に挫けてはいけないこと、いろいろな障害を乗り越えて実践できた時に大きな自信が持てるようになったこと、未知の知識や体験を習得する喜びを味わえたこと、外国の人たちが身近に感じられるようになったことなどが挙げられます。

この他に、耐性を育てるための全校強歩大会、生き方を学ぶための父ちゃん教室、日曜日での保護者参観、自己教育を育てるためのゼロトレランスなど、新たなことに勇氣を持って挑戦し、学校の活性化を図ろうと努めました。

最後になりましたが、私が学校経営をする上で心がけていたことは、次の四点でした。「一、誠実な姿勢で人に接すること。二、率先垂範の教育を実践すること。三、先を見通した教育を実践すること。四、勇氣を持って積極的に改善すること。」です。これらは人に言い聞かせながら、自分を奮い立たせていたことでもあります。

養護教諭として勤務する中で

養護教諭として小中学校に勤務し、もうすぐ定年を迎えようとしています。

初任当時は、養護教諭が全校には配置されていなかったため、知名度は低く、いちいち「養護教諭とは……」と説明しなければなりませんでした。

配置されても一校に一人でしたので、校長先生をはじめ諸先生、養護教諭仲間、医療関係者、行政関係者等多方面の方々からご指導やご支援をいただき、勤務してまいりました。

日ごろ勤務する中で、モットーとしてきたことの二つ目は、「開かれた保健室」です。特定の人だけの保健室ではなく、だれもが、いつでも利用できる保健センターとしての保健室です。保健室にはいろいろな生徒がやってきます。そこには、時代背景があり、もろもろの家庭環境があり、多種多様の価値観が存在します。親や先生に言えないようなことを話していく生徒や「あのときのアドバイスはよかったよ。」などと、卒業時に言い残していく生徒に、思春期の生徒の教育の難しさ、生徒と本気で向き合うことの大切さ、厳しさと優しさの必要性を教えられました。よく生徒から「保健室に来ると落ち着く。」という言葉が耳にします。何かを求めて来たときに、教室とは違った雰囲気、心身の症状を訴えやすく、養護教諭がいつでも対応してくれるという安心感のある保健室、その特性がそうさせるのかもしれない。

二つ目は、「救急処置を優先に」です。救急処置は命にかかわってくるため、失敗は許されません。迅速かつ適確な判断や処置が要求されますので、今でも難しく、反省させられます。また、たとえ小さなけがであっても、大きな問題となり、思わぬ方向へと展開することもあります。時には、救急処置をするときの心得を実体験から学ぶこともあります。ある難病の児童

が保健室に来て、けがの手当をしたのですが、中学生に成長したその生徒に再会した折、あのとき、何かは分らなかったけれど、先生がひどく心配していたことを覚えていたとのことでした。その児童は小一か小二でしたが、いろいろ感じ取っていたことに驚かされました。

三つ目は、「生徒一人一人を知る」を心がけました。全校児童生徒数が千人以上にもなると、顔と名前が一致しないことが多いのですが、知らないでは済まされたいと思いました。毎日の欠席、来室状況、健康診断、保健調査からの情報は不可欠です。救急処置のため、途中退席しなければならぬことが多いのですが、共遊の時間、学校行事、集会、登下校指導等にはできるだけ参加し、児童生徒とふれあう場を多くとるようにしました。宿泊行事は児童生徒理解の格好の場となります。以前は名札が常時ついていたので、名前を覚えやすかったのですが、最近では取り外さなければならぬ時代になり、とても残念です。

国際化、情報化が進む中で、子供たちを取り巻く生活環境、社会環境は著しく変化しています。そして、子供たちの抱える心身の健康問題（不登校、いじめ、喫煙、飲酒、薬物乱用、虐待、性の逸脱行動、生活習慣の乱れ、アレルギー疾患、感染症等）は深刻化し、養護教諭の職務の重大さを認識している今日この頃です。

今までに出会った多くの子供たちとふれあい、寄り添いながら、私自身も多くを学び、共に成長することができました。残り少ない在職期間を、児童生徒、職員の心身の健康の保持増進のために、微力ながら努めていきたいと思います。

自己を磨く

「惚れる」ことで見えてくる

私の好きな言葉に、「人や物事の魅力に心をひかれすっかり夢中になる」といった意味のやや俗な言い回しで「惚(ほ)れる」という言葉があります。これまでの体験から、教師として「惚れる」ことの大切さを実感するこの頃です。

○子どもに惚れる

私の小学生時代には、貯蓄奨励のためか、学校で「子供銀行」という定期的にお小遣いを預かるシステムがありました。多くの子が何百円という当時としては高額な預金をする中、兄弟の多い家庭に育った私は、お使いのごほうびで得たわずかな小銭を持って行ったものです。時の担任の先生は、私の名前こそ言いませんでしたが、こつこつと貯めた小銭を預金することに価値があることを皆の前で話され、間接的に私を励ましてくれました。一人一人の育つ家庭環境をしっかり把握し、的確な見守りと励ましでどの子も等しく大切にし、惚れてくださった担任の先生への憧れが、私の教職の道への原動力となりました。

○学校に惚れる

同僚性という言葉がトレンドですが、私は優れた力量を備えた先輩から多くのことを学びました。『前任までの学校は良かった』ではなく、『現任校こそ最高!』と誇れる職員であれ」との助言や、自らの苦労話ばかりか失敗談をも大らかに語られる先輩の、教師としての心意気に感銘を受けたものです。現在、新しい教職員の評価制度もスタートしましたが、この評価制度は、職員一人一人の目標実現への自己管理の営みであり、創意と熱意をもってやり遂げる過程を通して自信と意欲を高めるものであります。そして、校長として職員個々の多様なよさを確認できる制度でありたいと強く願っております。

○地域に惚れる

地域に根ざした特色ある学校が求められる今日ですが、職員がそろって地域に顔を出し、保護者や地域の皆さんと語らい、行動することで地域を肌で感じ取ることができ、地域にしっかりと根っこをはやすことができます。ところで、私はどの地域にも「宝島」があると信じております。地域に根っこを生やしながらその地域ならではの「宝島」を発見する。その「宝島」を子どもたちの教育活動に取り込んで学校の特色として生かしていく。このように、地域に惚れ地域の中の「宝島」を生かすことで保護者や地域の皆さんにも、さらに学校に惚れていただける良いサイクルが生まれるように感じております。

○授業に惚れる

学校は学ぶところであり、「授業で勝負」の気構えを大切にしたいものです。そのためにも、大相撲での勝負前の力士の仕切り同様、気合の入った授業研究が大切だと思います。若かりし頃、授業研究に夢中になり、自宅で度々夜が白々と明け行く経験もしましたが、こうした授業への一途な思いも大切にしながら、授業の奥深さに触れ楽しむことこそ教師冥利に尽きると思っております。

さて、「ドット・コム」はメールアドレスの一部としてすっかりおなじみですが、この「ドット・コム」にあやかり、「惚れる」の字の上下に「トコトン・コム」を付けると「とことん・惚れ・込む」となります。自己の「教師力」の向上を目指し、「惚れる」教師から「とことん惚れ込む」ことのできる教師にグレードアップできるよう、さらに自らを磨いていきたいと考えております。

困難を乗り越えていける強さを

私が新採としてS小学校に着任したのは大学を卒業して何年か経ってからである。児童数が二千名近い学校で、新採者三名が配置された。その中で最年長だった私は、最初から一年生担任だった。一学年八クラスの大所帯であったため、一年間一度も起案というものを経験することがなかった。

次の年、学校の分離独立に伴い、新設校のG校に異動となった。私が出張から帰ったときには、既に校務分掌が決まっていたように記憶している。私の係は体育主任と学校安全の主任であった。新設校に着任された校長先生は体育専門で、起案がなかなか通らないという情報が入っていたので、体育主任だけは避けたいというのが大方の先生の本音であったと思う。

新設校には、すべてを新しく創り出していく大変さがある。G校では決裁を受けるものはすべて起案によって行う体制がとられたため、体育関係の行事や学校安全に関わる細かなことも起案が必要となった。また、美術の免許をもっていた私は、校旗・校章・綴帳・プールのデザインや、制服・制帽の制定にまで関わることになった。さらに児童指導主任の先生の後期内留により、その仕事も任された。起案の経験をしたことのない新採二年目の仕事と考えると、少し無茶であったかもしれない。

一年目とは打って変わって忙しい生活となり、帰る時刻は遅く、家での起案文書作成が日課となった。すべてが初めての経験で、先輩の先生方などに一から十まで教えていただかなくてはならなかった。見よう見まねで行う仕事、密度の濃い仕事などできるはずもなく、ただ期日に間に合わせるのに一生懸命だったように思う。毎日わずかの時間を見つけては、先生方に

質問する生活が続いた。しかし、すべての先生方がいやな顔ひとつせず丁寧に教えてくださいました。夜遅くなることもしばしばだった。

今思うと、そうした時間が、先生方の経験から得た知恵に触れるかけがえのない時間だったのだと思う。そして、このような先生方との関わりが、やがて自分を支えてくれる大きな力になったと思う。苦勞させることの意義を表す諺があるが、いつの時代にも普遍であると改めて思う。大事な仕事を与えていただき、先生方から様々なことを学んだことが心の支えになり、教職を続ける強さになっていることを思うと、感謝の気持ちでいっぱいである。

先輩や同僚に謙虚な姿勢で学ぼうとするとき、先輩・同僚は必ず手を差し伸べてくれる、そして、たくさんの人間関係が自分を支える力になる、困難な仕事でもしっかり向き合い、それを乗り越えていくことが自分を鍛え、強くすることになるということを学んだような気がする。

教師にとって厳しい時代が続くが、これからの教師はそれを乗り越えていかななくてはならない。しかし、子どもに情熱をもって向かうとき、必ず子どもたちは応えてくれる。子どもの成長する姿を見て喜ぶことを生業とする仕事、季節を感じながら子どもたちとともに学んでいく仕事、こんな仕事があるだろうか。教師の仕事に魅力を感じてこの道を選んだ原点に立ち返るとき、子どもたちのためならどんなことでも頑張っていけるのではないかと思う。謙虚に学ぶ姿勢をもって仕事に向かい、教師としての仕事に情熱を持ち続け、子どもたちのために日々精魂を傾けていける強さを身に付けてほしいと思うのである。

「K先生を見てご覧。自分の仕事が終わるとほかの先生に声をかけて手伝ってるのよ。忙しいときはみんなで忙しく、ゆつくりできるときはみんなでゆつくり、ということですね。見習うといいですよ。」

初任のときに学年主任のI先生に言われた言葉です。

子供のときから先生に憧れ、学生るとき斉藤喜博先生の著書「島小の女教師」に出会い、ますます教師という職業に魅力を感じて着任した学校現場でしたが、夢と現実の違いに幻滅を感じていた頃だったと思います。

自分の至らなさを知り、それから「人に学ぼう・真似ぼう」と思うようになりました。

今日までいろいろな方から多くのことを学ばせていただきましたが、その中から特に次の三点を若い先生方に伝えたいと思います。

- ① 専門性を持つこと
- ② 月謝を払って習い事をする
- ③ 人とのつながりを大切にすること

①の「専門性」ということでは、私は三つの体育研究会に所属していました。それぞれに研究の方向性が違いましたので、学び方や指導法を身につける上で大変有意義でした。互いの実践を情報交換しあい、追試してまた他の人に伝えるなど、教師という創造性のある職業冥利に尽きる楽しさを味わうことができました。これからの先生方には、厳しい教育界を生き抜くために「このことなら、あの先生に聞いてみよう。」と言われるもの（専門性）を必ず持つてほしいと思います。

②は「教師でいる間は、自分も何かを他に師事しなさい」ということです。とかく子供を相手にしている教師は傲慢になりがちです。「教えている」ということで何か偉くなったように錯覚しがちです。他に習うことにより自分の教え方を反省したり、教わる側の気持ちを知らなければなりません。反面教師もありましたが、自分を振り返るよい機会となりました。「我以外皆我師」が私の座右の銘となっています。長続きしてものになった習い事がないのが残念ですが…。

③は仲間づくりです。特に結婚や子育て、親の介護など、家庭の中でも重要な役割を担う女教師にとって、課題は山積しています。

研究会では、研究内容について議論を戦わせたあと私的な悩みを聞いてもらったり、解決のヒントをもらったりして、次への意欲や向上心を掻き立てられたりしたことも数多くありました。勤務校が一緒でない仲間とは、日頃のしがらみがないので、気楽に話せることや、教育環境の違いから視野が広がるという良い面がありました。人との出会いはありがたいものです。

私が若い頃は男性教師が多く、女性は男性に従っていればよい時代でした。その中で出会ったY先生は「女性でもリーダーシップがとれるこんな素晴らしい方がいらっしやるんだ。」と目を開かれる思いのする方で、厳しい指導の中に心配りがされていて、「この方について行きたい」と思わせる魅力がありました。性格が違うので真似はできませんでしたが、何か困難に出会ったとき「Y先生ならどうなさるだろう？」と考えることができました。

教員生活を振り返って「人との出会いにより、支えられて自分は今日まで生かされてきた」ということをしみじみ思います。同業者以外の友達が少ないのが残念ですが、それは今後の楽しみということに。

教師として不易なこと

初めて教師になり、赴任した時のことを今でも覚えています。埼玉県秩父市立浦山中学校（現在は廃校）、一年担任。生徒は十人（男八人、女二人）でした。この十人の生徒の顔と名前は今でも覚えています。出席簿のつけ方もわからず、家庭訪問の仕方でもわからず授業の理解度をどこにおいて進めればよいかわからず……。〈先輩のベテラン教師がいつてくれています。〉今顧みると迷惑ばかりかけていたと思います。生徒はまさしく十人十色でした。

その時の校長が「愛と信頼」について語ったことがありました。内容は違いますが、教育における「愛と信頼」とはこんなことではないでしょうか。

「お互いが信頼の上に立つ教育をしたいものです。まず生徒を信頼しましょう。信頼することとは愛することから生まれます。愛することとは、価値の受容者であり、創造者である生徒の内に潜む価値実現の可能性を信じ愛することです。お互いが生徒を愛する教師として、仲間として、信頼しあう教師集団を作りましょう。」

さて、こんな看板を見たことがあります。「退屈な授業は教師の負け」これは何を意味しているのでしょうか。教師にとつては同じ内容の授業を週に五回も六回もします。しかし、その授業はその子の人生の中で、今だけのたった一回の授業であることを忘れてはいけないと思います。大切なことは「教師は授業で勝負する 教師は実践で勝負する」ではないでしょうか。昔から専門職としての教師は一人で五役（すなわち五つの職種）をこなさなければならぬと言われています。それは学者、医者、役者、易者、芸者（達者という人もいます）です。これは今でも十分に通用することです。

教師というものは、

一 学者として、十分な専門知識を持ち、学問を探究する姿勢を教える。生徒が出す質問にたどころに答えるだけの専門的な該博な知識を身に付けておく必要がある。

二 医者として、生徒一人一人の「わからないところ」を早期発見し、早期治療、早期回復に努める。同時に「勉強したくない病の患者」の適切なカルテを書き治療にも当たる。

三 役者として、教室という舞台で授業を新鮮に演出し、観客という生徒を引き付け、飽きさせない。変幻自在が望まれる。

四 易者として、子供たちの将来性や進むべき道について見通しを立てて、適切なアドバイスを与える。特に、担任は生徒の将来を担う責任を負う仕事であることを肝に銘じなければならない。

五 芸者として、生徒たちにとって楽しい学校時代を送らせるためのエンターティナーでなければならぬ。

以上が五者の説明です。もちろん、こんな理想的な教師に誰もがすぐになれるわけではありません。しかし、私たち教師が五者をめざし、懸命にかつ誠実に努力していれば、いつかはかなうことです。五者をめざすために必要なことは「本を読む」「人間を学べ」「自己研鑽を怠るな」です。自戒を込めて。

お薦めする本

森 信三 教師のための一日一語 寺田一清 編 致知出版社

安岡正篤 一日一言 安岡正泰 監修 致知出版社

宇都宮市立雀宮中学校 鈴木 希 一

趣味の力

趣味と言えるものは二つほど。一つは日曜大工であり、もう一つは民族楽器チャターを弾くことである。趣味という言葉の意味の中にある「ものの美しさやおもしろみを理解し味わう力」ということからすると、二つとも該当するのではないかと自分なりに思っている。楽器は毎日三〇分から一時間程度練習をし、日曜大工については必要に応じて休日に製作している。なかなか趣味の時間を生み出すことは難しいので、二つともまだまだ技術的には未熟である。

民族楽器チャターについては、楽器の音色に引かれ、現在月に一〜二回レッスンに通っているが、なかなか思うようにはかどらない。受けたレッスン内容に工夫を凝らしながら毎日練習しているが、手が素早く動いてくれないだけでなく、リズムが狂うと家内から「そのところおかしいわよ」とクレームがつき、ピアノでリズムをとってもらっている始末である。しかし、難しいところがやがて弾けるようになると嬉しいものである。このように、悪戦苦闘しながらなんとかやってこられたのも、弾けなかった曲が弾けるようになった喜びや美しい名曲を弾きたいという目標があったからだと思っている。

日曜大工については、教頭職の時に修繕や物を作る機会が多く、仕事の一部が趣味になってきたようなものである。いろいろな道具に慣れるに従い様々な物作りにチャレンジするようになった。物作りでは、あらかじめ機能面での条件を十分に踏まえる以外にデザインのことも考慮しながら作品をイメージし、次にそこに使用される材料・材質や道具などを検討したり、作業工程についても計画したりするなどして、作業に入るようにしている。ある程度作品のイメージや作業段取りがまとまると、予算を頭にインプットし、ホームセンターへ足を運び、材

料探しから始まる。機能面やデザインなどを頭に描き、材料を手に取り、自問自答しながら時間をかけて探し回る。ホームセンターは創造力を大いにかき立ててくれる場である。製作の段階では、作業工程の段取りを間違えると大きな失敗をするので、工程によっては作業を念入りに進めなくてはならない。作品の善し悪しはよい道具とそれを使いこなす技術が大きく影響するが、完成したときの達成感、満足感は何とも言えないものがある。難しい作品であればあるほど、その喜びと充実感は大きい。特に褒められたり、おだてられたりすると次の作品製作の大きなエネルギーとなる。

以上、私のつたない趣味を紹介したが、それが自分の仕事に対していろいろな面で役だっていることを日々実感している。それは、趣味に向き合う過程で教育に関わる事柄をたくさん体験するからだと思っている。これまでの様々な体験から、趣味にこだわりを持つようになるとさらに深みのある事柄が身に付いてくるのではないかと思う。例えば、「継続は力なり」という言葉は、趣味を継続して取り組むことによって、言葉の意味が深く理解され、言葉に重みが増すようになってくると思う。趣味に没頭すればこだわりが生じ、それが自分の能力に磨きをかけ、ものがよく見えるようになったり、幅を広げたりしてくれる。それは趣味の世界だけでなく、仕事の面においても自分の視野を豊かに広めてくれるものと思っている。たかが趣味ではあるが、仕事の面で大きく影響している。趣味は人生を楽しく豊かにしてくれるだけでなく、教育という仕事を側面から力強く支えてくれている。また、それは埋もれた能力を掘り起こしてくれるかもしれない。

経験してきたことから

放課後、合唱部の美しい歌声と、サッカー部の指示し合う声が快く響いてきます。穏やかな夏休み明け、生徒たちは熱心に授業に取り組んでいます。

こうした生徒たちを前にして、今、改めて「望ましい教師の姿」を考えると、「果たしてどんなものなのだろう」と考え込んでしまいます。あれこれ考えて思いついたのは、「教養があり、洗練されていて、礼儀にもかない、人により感じを与える上品さ」ということです。子供の中にも上品さを充分感じさせる子もいますが、大部分の子が学校生活などを通して、様々な礼儀作法や教養を身に付け、洗練された好ましい大人に成長していきます。この成長過程で、子供たちの前に立つ私たち教師は、子供たちにとって少しでも模範的な大人であることが求められるのではないのでしょうか。私たち教師は生まれも育ちも皆違います。しかし、児童生徒の前に立つには、まず誰もが健康な肉体と精神を求められ、その中から醸し出される気品が求められるでしょう。そして、私たちは少しでも人間としての上品さを身に付けると同時に、教師としての研修を重ね、児童生徒にとって魅力ある人格者として児童生徒の前に立つのがよりよい教師の姿ではないのでしょうか。そのような先生方から、若かった私はいろいろ学ばせていただきました。

例えば、学習指導面で、「児童生徒が自主的に課題解決に対処していけるようにするにはどうしたらよいか。」というようなことでした。そのためには教科等の学習の計画をしっかりと立てさせ、学習の技術や方法をしつかり理解させること。グループ学習の仕方を通して「一人学び」の方法を一人一人に身に付けさせること等を学びました。残念ながら、これは志半ばでつ

いにやり遂げるところまではいきませんでした。努力するうちに、児童の活動は活発になるとともに児童が自主的に学習をするようになり、一人一人の意欲の高まりやグループ活動の活性化に繋がっていったように思い出されます。特に、学芸会や体育科等での表現活動では、生き生きと演技をしていた児童たちの姿が今でも思い出されます。

次に、最近多くなってきた問題で、いわゆるクレーマーと称される問題について述べたいと思います。この問題は、人権に深く関わることが多く、発件数も今後ますます多くなりそうです。私たち教職員は、学校として解決できない部分を理解してもらうように対応しますが、この類の問題を訴える保護者の中には、自己権利の主張や自己正当化をし、他の生徒のことを考えず、自分の子供の正しさだけを証明しようとする方も見られます。そして、問題の核心を知っているのが当事者の子供だけである場合が多く、問題解決を他の機関などに頼ることができません。結局解決できないままになってしまいます。当事者の子供が真実を言わないことが多いからです。しかし、当事者は自分の子が原因ではないと信じて疑いません。その結果、真実は不明という曖昧な形で収束に向かいますが、決して事件が解決した訳ではないので、双方ともすっきりした気持ちにはなれません。それでも学校は、根気強く事実経過を繰り返し説明し、理解を求めていかねばなりません。この場合にも「教師の姿」がにじみ出てきます。

忍耐と努力を惜しまず、愚直と思われても継続することからは、実践する教師の気品が漂ってきます。気品のある教師は、児童生徒に意欲を喚起できる魅力ある教師になれるのではないのでしょうか。

学びつつある教師のみ教える資格あり

教職十五年目でした。私は、先輩教師から「学びつつある教師のみ教える資格あり」という言葉を聞きました。そして、私に「なぜ、学ぶ必要があるのか。」と問われたことがあります。教師という仕事にも大分慣れ、自分自身への厳しさを忘れかけていたころでした。

先輩の言葉を、さらに具体的に考えていくと、「なぜ、研修しなければならぬのか。」にもつながります。教える内容や方法がすでに完璧なら、講習会や研修会等に参加する必要はありません。授業が、学級や担当するすべての子どもに対応できるのなら、研究授業を実施して自分の指導力をより高める必要ありません。

また、人権教育ではよく保護者啓発という言葉が使われますが、この啓発の前提には、自己啓発が必要だと思います。つまり、自己啓発なくして保護者啓発はできないのです。

先輩は「教師は、完璧ではない。だから、謙虚に学びなさい。つまり、自分が不完全であることに気づきなさい。」と教えて下さったのだと思います。私にとっては、衝撃に近い言葉でした。

それでは何を学ぶのか。私は、一つは専門性、もう一つは人間性を高めていくことだと考えます。もちろん、二つはきちんと線引きして分けられるものではないと思います。両者関連し合いながら、互いを高め、深まっていくものだと思います。

まず、専門性については、公開発表会や研修会等に目的をしつかりとって参加することです。専門性は、確実に向上していくと思います。また、研究授業を積極的にやってみることは

重要です。教師は授業のプロです。指導力を高めていくのは当然です。もちろん、子どもたちとの日々の実践の中で学ぶことは数限りないほどあります。

次に、人間性を高める・深めることについてです。「教師として」の前に「人として」があります。これは、極めて重要なところだと思います。「豊かな人間性」を培っていくのです。もしかすると、人間性は磨いていくものかもしれませんが、磨いていることが、子どもたちを「感化」していくのだと思います。場合によっては、「薫陶」という言葉の方が、より当てはまるかもしれません。

さらに「失敗から学ぶ」ことも大切です。「失敗と書いて経験と読む」という言葉もあります。失敗から謙虚に学び、次に活かしていくことです。

「学びつつある教師のみ教える資格あり」、そして「不完全さの認識」を教えていただいてから二十数年が経ちます。きつと「完全」にはなれませんが、「不完全」から「完全」に、少しでも近づこうとしていく努力が大切なのかと思います。教師としての原点を示していただいた先輩からのアドバイスでした。

まとめにはありませんが、「教師は親ではない。兄弟でもない。友だちでもない。餓鬼大将でもない。だが、そのすべてでありたい。」長野県の毛涯章平先生の言葉です。(『ただひたすらに』第一法規)

生きることは学ぶこと

「人は人によって人となる」、職員室の壁に掲示されている日めくりカレンダーの表紙のこ
とばである。三十七年の教職期間を振り返ると、まさに実感としてうなづくことばである。な
ぜうなずくかというところ、これを「子どもは教師によって人となる」と言い換えてもいいほど、
教職の重さを感じているからである。教師は、子どもの一生に大きな影響を与える存在である。
教師のたったひとことできえ、その子の現在を、将来を左右することが、現に多くある。

亀井勝一郎さんは「私は人生における最大事は邂逅だと語ってきた。ある時期、誰と出会っ
たことで心の転換をせしめられたか。その誰が人生の根幹を成すのではないか。自己は自己の
みから生まれることはできない。必ず他者において自己となる。」と著書に書いている。教師
は、子どもたちにとつての「誰」になれる、いや、ならなければならない存在であると思う。

この「人」と「誰」に値する、子どもによい影響を与えられる教師になるには、やはり「教
師として人として学び続けること」であろう。教職経験にかかわらずである。千葉県の元教員
・校長の野口芳宏さんは「までの努力、からの努力」を強調している。「教師になるまで、あ
るいは校長になるまでの努力は誰でもよくする。だが、教師、校長になってから努力をする人
は少ない。」ということだ。素直に聞こう。素直にとらえたい。

「からの努力」をどのようにしたらいいか。特に、教職十年前後までの人は参考にして欲し
い。茶道の千利休の教えに、「何かを学び、ひとり立ちしていくまでの過程で、人は守・破・
離の順に成長していく。」というのがある。まずは、先輩の真似をし、その教えを素直に守る
こと。次に、教えを守るだけでなく破る行為、つまり自分で創意工夫し、新たなやり方を考える

こと。さらに自分の技量を高めるため、自分自身の考えで学んだ内容を発展させることである。
このステップは、教職にかかわる者にも大いに参考になるものである。

教師として自己の何を高め、磨かなければならないか、必要な資質は数多くあるが、教職に
携わる者すべてに共通すること、私は特に二つをあげたい。

一つはものの見方考え方をより深くすること、二つは続けることである。この本質がわかり、全
体を見ることができ、先を見通せる見方・考え方であります。表面思考、部分思考、目先思考
だけでは教育効果が心配である。私の経験からだ、宗教書はものの見方・考え方を深めるの
に役立っている。信州教育研修の折り、長野の教員は正法眼蔵、典座教訓、歎異抄等の輪読会
を学校単位で行っているのを知った。以来影響を受け、様々な宗教書の解説書が主だが、二十数
年愛読している。ちなみに、正法眼蔵は相田みつをさんの生涯の座右の書である。

もう一つは感性を磨くことを続けることである。豊かな感性とは、高久清吉さんのことばを
借りるが「人間や自然事物などについて、その真理や事実、よりよいもの、より美しいもの、
より崇高なものに対する鋭いしかも安定した感受性」であります。「冷暖自知」ということば
がある。冷たい、暖かいというのは自分で感じてみない限りわからないという意味である。子
どもたちの感性を育てるとき、教師の感性の度合いが問われる。まさに冷暖自知であります。

教職は困難なことが多いが、負けずに自信をもって前向きに教育実践してほしい。自信は学
び続けることによってより大きくなり、より本物となる。

「教師として生きること、学ぶこと、学ぶことは生きること」であります。

学校力を高める

— 組織の力・地域との連携 —

「教職」生活で大事にしたいこと

自らの来し方に思いを巡らせ、「教職」生活を振り返ってみます。

一 小学校学級担任（教諭）として

新採教員として赴任した学校は、二十六学級（普通二十四・特二）、児童数九百二十名、教職員数四十七名（都職員三十五、市職員十二）の東京都小金井市の小学校でした。未知の土地での生活が始まり、不安な気持ちで出発しました。三年一組児童三十八名の担任となり、三人の同年先輩教員から、学級経営の手ほどきや授業の進め方のアドバイスを受け続ける毎日でした。学校と寄宿先のアパートを往復する生活の繰り返しでした。記憶していることは、教職員間に「若い教員をみんなで育てよう。」という雰囲気共有されていたことです。教務主任を兼務していた同年男性教員から、「これから三年間であなたが教員としてやっていけるように指導しますよ。」といった言葉を頂戴しました。手取り足取りの指導を受け、教員としての心構えや身の処し方など習得できました。また、年配のS先生やH先生からは「小学校は率先垂範することと己の価値観を問い直すことですよ。」と教えていただきました。気が付くと、学習指導や児童指導をするときの指導の基本になっています。初任校で体験し身に付けたことは、今の自分の「教職」生活にしっかりと根付いています。

二 社会教育行政職員（社会教育主事）として

平成元年から派遣スポーツ主事・社会教育主事として、旧南河内町公民館や河内教育事務所では社会教育行政の仕事に携わりました。学校とは違って、成人対象の事業を多く実施します。職務に精通することと、管内市町村の社会教育関係職員や参加者とのコミュニケーションを深

めることに時間はかかりましたが、「教育の世界の広がりや深まり」を知ることができました。

世の中の基調は「学校歴偏重から学習歴重視へ」と変化し始め、多くの市町村が「生涯学習まちづくり」事業を盛んに推進するようになってきました。個人レベルでは人生八十年時代を迎え、「労働と余暇と学習」の視点で考えることを求められています。学ぶことが生きがいともなってきました。「人々がいつでも・どこでも・自由に学習機会を選択でき、その成果が適切に評価される生涯学習社会」は、身近な地域社会にも浸透してきました。これからは大人も子供も「学ぶ意欲」をもち、「自分を高める」努力が必要な時代に入ったと思います。そうしたことを念頭に置いて、学校教育を考えていくことが必要だと感じています。

三 小学校管理職（教頭・校長）として

平成九年から小学校の現場に戻りました。教頭・校長として学校運営・学校経営の仕事が中心になりました。現在、「児童が安全・安心な環境で生活できる教育効果の高い学校づくり」を目指しています。解決すべき課題はたくさんあります。在職できる期間は少なくなりましたが、学校改善を目指し、学校経営に全力を傾注したいと考えています。

四 おわりに

昭和四十八年から始まった「教職」生活も、三十四年余の歳月が過ぎました。この間の日本社会の変貌は本当に凄まじいものでした。私個人は、途中、転職も考えましたが、先輩や同僚からの励ましや支援を得て「教職」を続けることができました。感謝しています。「教職」生活を顧み、周囲の方々の励ましや支援、アドバイスの一つ一つを大事にすることが肝要であると実感しています。

上三川町立上三川小学校 大八木 俊夫

ピアサポート活動を通しての自尊感情の育成

六年前、鹿沼市のN小学校に校長として赴任した。全校生百名程度の小規模校である。子どもたちの遊んでいる様子を見てみると、どうも十分に解け合って遊んでいるようにみえない。特に、低学年と高学年の交流が少ない。原因はすぐ分かった。構造上の問題で、低学年と高学年の校舎が分離しているため、子どもたちは登校して校舎に入ると、交流が少なくなるのである。何とかこの状態を打開し、全校生が一緒に楽しく交流できる活動をと、模索した。その時、目に止まったのが「ピアサポート活動」の理論であった。この活動は、上級生に下級生をサポートさせることにより、自己有用感を育てる活動である。

まず最初に取り組んだのが「全校集会の並び」だった。上級生へは、「集会の時には、しっかり下級生をお世話しましょう。」と話した。そして、一年生の脇には六年生、二年生の脇には五年生、三年生の脇には四年生を並べた。低学年の子どもが、姿勢が崩れたり集中力が薄れて話を聴かなくなると、上級生がやさしく注意していた。また、一年生もお兄さん、お姉さんと一緒に話が聞けるので大喜びだった。

次に、一年生生活科の「七夕の飾り付け」を、ピアサポート活動で行った。早速、一年教室に七夕の竹が用意された。六年生は、休み時間などを利用して一年生の教室に向き、折り紙の折り方や文字を教えたり、短冊の文と一緒に考えたりした。願いの短冊を付けるときには、一年生を抱っこして付けていた。完成した七夕飾りは体育館に飾り、児童会主催で「七夕集会」を全校で開いた。KLV（カリブ・鹿沼図書館ボランティア）の協力で、七夕に関する読み聞かせをしたり、七夕の歌を歌ったりして楽しい一時を過ごした。集会の最後に、六年生は一年

生から「たなばたかざりをいっしょにつくってくれてありがとう。とてもきれいにできたよ。六ねんせいがいすきです。」という感謝の言葉を受けた。

それからピアサポート活動を本校教育の中核に据えた。着衣水泳でも六年生が一年生と一緒にプールに入ってサポートをした。運動会、ふれあいフェスタ、持久走大会、なわとび大会などもピアサポートを応用した学校行事になった。二年生の生活科のリース作りは、五年生がサポートしながら作成した。「ピアタイム」（ロング休み時間）には六年生が三つの班に分かれて「音楽集会・チャレンジ集会・ゲーム集会」など、次々と楽しい集会を企画し実践していった。三学期には、五年生がピアサポートトレーニングのエクササイズを実施した。五年生にサポーターとしての自覚を高めるために「サポーター認定書」も授与した。次年度にはその効果があり、一年生が入学してくると、早速、六年生が自主的にグループを組んで、「朝の会」までお世話活動に入った。児童会でも、給食委員による一年生の配膳のお手伝いや後片付け、集会委員会によるチャレンジ遊び、図書委員会による低学年への読み聞かせなど活動が広がっていった。このような一年間の活動を通して、六年生の反省からは「初めは一年生にどう接していいか分からなくてとまどった。今では、どうすれば喜んでもらえるかが、だんだん分かってきた。」と書かれていた。また、ピアサポート活動は、学年の枠を越えて活動するので、教職員全体の連携協力も深まる。そのため、みんなで子どもを支えていこうという雰囲気が高まってくる。

私は、今こそ対処療法から、計画的、予防的、開発的な「育てる指導」への転換が必要であり、子どもたち一人一人に自尊感情を育てなければならないと思う。

鹿沼市立みどりが丘小学校 小川 一 男

心くばり

学校栄養職員として仕事を始め、三十数年が過ぎた。随分長く続けてこられたものだ、自分でもびつくりする。子どもたちの、給食に喜ぶ顔に救われ、「おいしかった！」の一言に励まされ、ここまで、仕事を続けてくることができた。

激変する社会状況の中、子どもたちを取り巻く食環境も大きく変化し、それとともに、学校給食や栄養士に対する期待や要望も大きくなり、多様化してきた。

子どもたちに、おいしい給食を、より良い給食を、という根本的な想いは変わらないが、年々、さまざまな問題や制約が多くなり、その責任の大きさに、考え、戸惑うことが多くなったのも事実である。

そんな時には、一緒に考え、励ましてくれる良い人間関係を持っているということが、一番大切に思われる。私たち学校の栄養士にとっては、それは給食主任の先生であり、経験豊かな調理員さんであってほしい。

私が初めて赴任した学校の給食主任の先生は、四十代の男の先生だった。学年主任でもあり、他の忙しい校務分掌を持ちながら、大変な仕事のため、敬遠されがちな給食主任も、快く引き受けてくれていた。

当時、私たち栄養士には初任者の研修制度もなく、仲間同士の組織もなかった。毎日の仕事をこなしていくには、私にとって、給食主任の先生と調理員さんが頼りだったのを覚えている。

立場が違えば、考え方も違い、理想を語る私と、現実を見る調理員さんとの間には意見の対立もしばしばあった。そんな時、お互いの立場を考えた仲介してくれたのが、この給食主任

の先生だった。私には、どうしてそうなったのか、過去の経緯を教え、調理員さんには、失敗して納得することの大切さを説いてくれた。

早くから、「食べる力は生きる力」の考えを持った先生で、とても給食を大事にし、給食に對する目くばり、気くばりには大変なものがあつた。私や調理員には児童の声や反応を細かに指導し、児童や保護者には食事や給食の重要性をアピールしてくれた。

この給食主任の先生と近くで接していて、目くばり、気くばり、心くばりの大切さを知った。仕事の基本、人間関係の基本は、いかに物事や相手に目くばり、気くばりが出来るかだと教えられた。

「心くばり」の達人になるには、まず「目遣い」(目に見えるものをしっかり見る)から始まり、「目働き」「目くばり」「気働き」「気くばり」へ進み、「心働き」の段階を経てやっと「心くばり」に行き着くと、何かで読んだ事がある。

気くばり、心くばりは教えられて出来ることではないが、人とより良い人間関係を築いていくためにも、自然な「気くばり」「心くばり」が出来るようになりたいと思い続けてきた。

また、最近、他人への心くばりと同じく、自分への心くばりがとても大切で必要なことだと感じている。自分が心身共に健康でなければ、他の人への心くばりは出来ない。自分の心や身体にも気くばり心くばりをしながら、これからも素敵な仕事、素敵な人間関係を持てるようにしていきたい。

これからの学校事務の在り方

明治、昭和に続く第三の教育改革と呼ばれた教育改革も昨年末の教育基本法の改正を受けて大きな節目を迎えました。経済、財政、社会保障制度の改革とも相まって教育制度に大きな改革の波が押し寄せ、まさに教育に関わる人、モノ、金すべての要素にその見直しが求められています。教育内容が問われ、学校経営が問われ、教職員の質が問われ、そして、その給与の在り方が問われています。

これらの一連の改革の中で、学校事務職員にとって大きな改革のスタートとなったのは、平成十年九月、第十六期中央教育審議会答申の「今後の地方教育行政の在り方について」であると思います。その中で、「学校事務・業務の効率化」の具体的方策の一つとして「学校事務の共同実施」が提言され、学校の自主性・自律性を確立するためには、学校の事務・業務の効率化を図る必要があるとし、共同実施という手段を用いることで、学校事務が再編・組織化され学校事務職員の一人職の限界が解消され、事務の効率化、事務部門の強化が実現されると思っています。

そして、今年三月の中教審答申では「今後の教員給与の在り方について」の第二章「教員の校務と学校の組織運営体制の見直し」の中で「教育の質の向上を図っていくのは、何よりもまず、教員が子どもと向き合い、きちんと指導を行える時間の確保することが重要」として、校務の見直しや職種に応じた役割の分担の明確化を図り、学校組織のマネジメントをしつかり行った上で、「教員が抱える事務負担を軽減するため、事務職員が学校運営に一層積極的に関わるとともに、そのサポートにより教員の事務負担を軽減できるよう、事務の共同実施の促進、

事務職員の質の向上のための研修の充実などを行うとともに、教育委員会の判断により大規模な学校や事務の共同実施組織に事務長（仮称）を置くことができるよう制度の整備を行うなど、事務処理体制の充実を図っていくことが必要である。」と提言しています。

私は、平成十三年度から十五年度までの三年間、栃木県公立小中学校事務職員研究協議会の会長を務めさせていただきました。その間、この答申で提言された学校事務の共同実施を通じた新たな学校事務の組織化の研究に取り組んでまいりました。本県の共同実施は、平成十一年度、「事務の効率化のため研究加配」制度を受け、喜連川町から始まり、翌年には茂木町において実践研究が始まり、平成十三年度からは、第七次定数改善計画による「きめ細かな学習指導や教育の情報化の支援のための事務部門の強化対応を行う学校への加配」制度に基づき、四地区四名が加配され、翌年度には七地区七名、そして本年度は八地区八名が加配され、学校事務の共同実施の実践研究を推進しています。

そして栃事研では、平成十七年度から栃木県内すべての学校で加配のない共同実施の実践研究に取り組んでいます。共同実施の実践研究開始から九年が経過し、他県においては、宮崎県・三重県を始め、広島県、大阪市、青森県、群馬県、新潟県、千葉県等数多くの地域で学校事務の共同実施が、教育行政の新たな制度としてスタートしています。栃木県においても、他県に遅れることなく、県教委、地教委等教育関係諸機関と連携し、「研究領域」から「制度化」へ、新たな学校事務の組織化が一日も早く実現し、教育新時代にふさわしい学校運営機能の確立と教育行政事務の改善に繋がることを期待しています。

組織力を活かして

本校は、生徒数七百四十五名、職員五十六名である。

今年の夏休みも様々な大会の応援に行ってきた。生徒たちの真剣なプレーに応援の熱も入る。そして、本人の努力と指導者のおかげで、陸上競技大会の千五百メートルで全国一位という感激の場面に会い、ソフトテニスでは、関東大会団体優勝といううれしい日を味わった。また、NHK関東甲信越ブロックの合唱コンクールにも出向くことができた。これもまた、生徒たちや職員の熱心な取組のおかげである。

「数は力だ」とも言うが、力は、プラスの力にもなるし、マイナスの力となることもある。学校集団を、生徒も職員も充実した日々を送れる活気ある集団として機能させるためには、学校全体としての方針・努力や熱意・考え方が大切である。私は、職員全員が学校経営に提案型の実践で参画する行動力を大切にしてきた。と同時に、校長の教育に対する姿勢が大事であると自戒してきた。

また、近年、学校には、時代の要請とともに民間企業感覚が要求され、必要になってきた。それに応える一つとして、私は、生徒の多様な能力を多面的にとらえ、保護者に伝える通信表の工夫を心がけてきた。一人一人の努力の過程や足跡を的確にとらえること。それは、生徒から目を離さず、成長の変化をとらえる教師の目を肥やすことであり、教師としての大事な資質を伸ばすこともある。

その人材育成の方法を「トヨタ流『最強の社員』はこう育つ」（若松義人著）から学んだ。それは、市教委の方針「人づくり教育」に合致している。

その本によると、「物づくりは人づくり」であり、「人づくりは自分づくり」である。「人の知恵を信じ、人の可能性を信じること」であり、「自分で考え、自分で行動して、自分たちに合うようにアレンジすること」である。単行本の中に共感できる内容がぎっしりと詰まっていた。「成功法改善・自分原因・達成理由分析・日々新・元気・小達成・先手・気持ち」の八領域に整理し、年度当初の学校経営方針に取り入れた。一時間以上話し伝えた。

人材育成は、組織力をいかに育てるかでもある。ノウハウがある。そのアイデア次第で職員は育つ。たとえば、復命書には今本校で使えることは何か、改善できるところは何かの視点で書いてもらった。「知恵のある人」から「知恵の出る人」への転換である。また、教科指導においても、生徒の理解力がここまで来たと具体的に指摘できること、指導の結果は自分に原因があると強く意識することなどを求めてきた。真摯に受け止める職員は伸びも大きい。

また、数年前、お盆の最中に児童連れ去り事件が起きてしまった。市教委からの電話を受けて大至急学校へ戻る途中、報道陣からの電話に困惑している日直からの電話を受けた。私は、即刻応援に来る市教委に一任し、それまで電話に出るなと指示した。職員全員に集合をかけ、刻々と来る情報を職員と共有するため、時系列で全てのメモに番号をつけ列挙した。保護者と学校と同一歩調・総力で対応するようにするなど、混乱の中で冷静さを自分自身に言い聞かせたのを思い出す。一夜明けて児童解放という朗報で、事件は解決した。予測を超越した危機の発生では、校長の即断・即対応・具体的な指示は責務である。

子どもが好き、学校が好き、仕事が好き。教師はこれに尽きると思う。

同一校勤務二十二年から得たもの

私は、同一校に三度勤務し、そのトータルは二十二年になります。最初は、昭和四十八年度から昭和六十年までの十三年間を教諭として、二度目は平成七年度から平成十一年度までの五年間を教頭として、三度目は平成十六年度から平成十九年度の四年間を校長として勤務しております。なんと教職年数三十八年間の約三分の二が同一校勤務であり、小中学校の教職員としては稀な存在かと思えます。

昭和四十八年当時、私は独身であり、同年代の先生方が少なかったため、先輩方の宿直を頼まれ、一週間のうち二日から三日は学校で寝泊りしておりました。生徒たちと比較的年齢も近かったため、毎晩のように近所の生徒たちがおしにかけてきて、友達関係の悩みや学習相談など、よく言えば学習塾、悪く言えば遊び場を提供しておりました。また、この時期は先輩方との酒の席も多く、教師としての使命感や教育観、指導方法や地域保護者の考え方など、とくと鍛えられました。さらに、昭和四十九年は当時の田中角栄首相により「教職員の人材確保に関する特別措置法」が成立し、我々の身分がしっかりと確保されるとともに、高度経済成長の波にのりボーナスの額よりベースアップの差額の方が多いという現在では考えられないような時代であったと記憶しております。

昭和五十五年の五月、当時の校長からいきなり呼び出され、体育教師であった私は、文部省指定の格技指導の推進校（指定理由Ⅱ施設・設備、指導者のいない学校でどう展開するか。）として、研究推進実践部隊長を言い渡され、三カ年孤軍奮闘を強いられました。三十代前半でもありましたので、研究を通し多くの方々と交流することができ、指導者としての視野が大き

く広がりました。また、体操競技や陸上競技、相撲などの部活動指導においても、ある程度の成果が見られるようになり、昭和五十九年には、体操競技と相撲において、念願であった栃木県総合体育大会の二種目で団体優勝をし、県代表として関東大会に出場いたしました。特に、山梨県忍野村で開催された相撲大会においては、あれよあれよという間に決勝戦まで進出し、後の三代目横綱若乃花と対戦することができました。また、翌年の昭和六十年にも体操競技としては最強のチームを編成することができ、二年連続団体優勝の栄に浴することができました。平成七年、荒れていた小川中学校に、再び教頭として勤務を命ぜられ、教職員の先頭に立つて、生徒の思いや願いを聞き、解決に取り組みしました。その際救われたのは、保護者の方々の深いご理解とご協力、並びに一町一校である中学校を何とか立て直したいとの町民一体になった取り組みをいただいたことです。そのおかげで、一年間で平穏な学校へと立て直すことができました。

平成十六年、今度は校長として三たび赴任することになりました。生徒の八十五パーセントの保護者は、教諭当時の生徒であります。入学者名簿を手にとると、八十五パーセントの保護者の顔と名前が一致します。立派に成長した保護者や、期待に胸を膨らませて入学してくる生徒たちを迎える私自身が興奮します。何と幸せなことでしょう。

今、学校現場は、教育基本法の改正を始め教育再生会議、中教審等で次々と新しい施策や制度が打ち出されると同時に、学力の保障や安全管理、不登校対策など喫緊の課題を抱え、きわめて多忙な状況になっております。しかし、いくら改革や制度が変わっても教育の原点は人なり、子を知り、親を知り、地域を知らずして成果は望めないと考えます。

地域の関係機関に協力していただいて

長い教員生活の中で、いろいろな家庭環境の児童とのかかわりがあった。保護者から虐待を受けていた児童や、保護者自身の問題のため不登校になった児童等、問題の多くが親に起因するものだった。担任は親身になってかわり、時には、食事や、衣服、入浴の心配までもする。しかし、学校だけでは解決できない保護者の問題などは、市の相談員、保健師、民生委員、児童相談所、地域の福祉施設など、たくさんの方々にご協力をいただいた。すべて解決したわけではないが、一部を紹介したい。

・女子児童が夜になっても帰宅しないとの連絡があり、全教職員に招集をかけ地域を探した。程なく発見されたが、前年にも、一晩行方が分からずに翌日発見されたこともあった。家庭の事情を担任が探ると同時に、民生児童委員にも相談し、また児童からも話を聞いたところ、養父の性的・身体的虐待、母親のネグレクトが確認できた。市の相談員を通して県南児童相談所に相談し一時預かり後、福祉施設入所となった。その年の夏休みに、福祉施設を訪問し、女子児童に面会した。身長も伸び、顔もふっくらとし、安心してしていると、職員の方が、「先生と一緒に帰るか。」と女子児童に聞いているのを耳にし驚いていると、「ここにいます。」と言って、手を振って見送ってくれた。

・母親が朝起こしてもくれず、食事も作らないため、担任や児童指導主任が毎日迎えに行っている男子児童がいた。母親と話すと、「家の中に、たくさんのお虫がいて、それを退治するため家事ができない。」とのことだった。市の相談員に相談すると、市では保健師を家庭に派遣し、母親の話し相手になってくれた。急な改善は見られなかったが、何度も話を聞いてもらったこ

とで母親の気持ちが安定し、少しずつ家事もできるようになり、児童もだんだん登校できるようになった。

・身体的虐待を受けた男子児童がいた。担任や校長が養父と何度も面談し、体罰はいけなと話すと、その時は納得するが、それでも虐待を繰り返していたため、市の相談員を通して児童相談所にかかわってもらった。養父はしつこくとして虐待の事実を認めず、相談所で一時預かりすることもできずにいた。当時、総合教育センターで男子児童が教育相談を受けていたことから、学習や生活指導が必要ということで、養父を説得し、福祉施設に入所となった。

・母親が療養が必要な病気であるのに、父親に理解がなく、通院もできない家庭があった。地区の民生委員と市の福祉課の職員に相談し、病気のことや治療にかかる費用のことなどの説明を依頼した。その結果、父親も理解し、通院できるようになった。父親も担任の説得には応じなかったが、専門の方からの説明には納得したようだった。母親の通院中、障害のある児童の放課後保育については、地域の福祉施設にある障害児児童デイサービスを紹介し、また、同じ福祉施設内にある障害者相談支援センターとのケース会議なども定期的に行い、よりよい支援を探っている。

あるとき相談所の方から聞いた「親子関係は一生です。施設を退所しても親子なんですよ。」という言葉が今でも耳に残っている。親を変えることはなかなか難しいが、子ども一人一人の生活状況をよく把握し、長期的視野に立って指導・支援にあたるとともに、親への支援については、学校がすべて抱え込むことなく状況に応じて関係機関に協力を要請することが大切だと思っている。

情熱を傾けて

生徒指導のできる教師に

今、中学校で日々発生する様々な生徒や保護者の問題に授業以上のエネルギーを費やしている教師の姿を見るにつけ、先生方が本来の業務である授業に専念するためにも、教師の生徒指導能力を高めていく必要性を感じます。日本は、いつの間にか学校依存型教育になり、家庭教育を補う生徒指導は困難になりました。

自分を振り返ってみますと、二十代の私は「生徒と接する時間や距離に比例して絆が深まる」ことを信念に、出来る限り生徒と同じ時間を共有して活動しました。授業で生徒と共に汗を流し、放課後は、毎日、プールサイドに立ち、校内持久走大会等の行事でも一緒に走りました。教師が汗する姿や継続的な声かけは、生徒の心に残像となり、いざという時のストッパーになります。体力のある若い年代は、労を惜しまず活動する姿を、あらゆる場で生徒に見せることです。それが、二十代の生徒指導だと思います。

保護者によって違う対応があることを学んだのは三十代でした。ガラスや校舎が壊れ、第二次荒廃期と言われた時期に、私は東部地区の学校で十年間勤務し、その七年間、三年生を担任しました。紙面には書けない価値観の全く違う世界の家庭で育った生徒を受け持つ等の困難もありましたが、心身共に充実し、体力もあつたので、やりがいを感じながら校内人事に応えられたのだと思います。しかし、生徒指導の事例集や学級経営の月刊誌を読んで努力をしても、日々の実践と理論の間で納得がいかないことも多く、研修センターに半年間内留させていたきました。今思うと、三十代は、一学年十四クラスもの大規模校で、毎年違う主任と組織の中で大勢の先生方の判断や行動の仕方を学び、生徒指導は独りの考えで動くのではなく、組織の

一員として指導に当たる、集団の生徒に対しては職員も集団で対応する等、生徒指導の基礎となる生涯の財産を作った時期でした。

三十九歳から四十代前半の私は、西部地区の学校で生徒指導主事を経験しました。早朝、校地・校舎の安全確認後、昇降口に立ち、清掃と挨拶を励行しました。この時期は、覚せい剤等の薬物が、中学生に及び、生徒の顔を知らない警察官と一週間張り込むなど、詳細は掲載できませんが、生涯忘れることの出来ない勤務をしました。県警始まって以来の大事件と報道され、被疑者逮捕で生徒を保護できた時、初めて疲れを感じました。学校だけで解決できない問題は、内々で抱え込まず、関係機関と連携し立ち向かう勇気が大切です。

五十代で私は、南部地区の学校に着任しました。学校経営者は、管理者としての姿勢を色濃く出すのではなく、教育者としての姿勢を実践で示すことが大切だと考えています。鍵は「環境づくり」です。その一つは、職員・生徒一人一人が、力を存分に発揮できる人的環境づくりです。もう一つは、みんなが気持ちよく生活できる物的環境づくりです。私は、できるだけボトムアップできるように朝早く出勤しました。報・連・相の受け入れ態勢をつくり、毎朝、地域の方々や挨拶が交わされる学校周囲の掃き掃除を日課にしました。さらに、学校を変える原動力として、生徒が一丸となって全身全霊を注ぎ込む活動も重要と考え実践しました。（大修館「体育科教育」二〇〇七、四月号に掲載）この四月、最後の勤務校に着任し、焦らず、地道に進んでいきたいと思うこの頃です。

どうぞ、逃げない生徒指導の実践を心がけてください。

「情熱・挑戦・思いやり」を忘れずに

過ぎてしまうと早いもので、定年まであと半年になってしまった。実は私は教職に就くまで、いくつもの職を転々としてきている。だから新採の時は、すでに結婚して子どもが二人いた。家内からも「教員もあと何年持つかしら。」と言われていたことを思い出す。しかし、何度か辛い修羅場はくぐったが、一度もやめようとは思わず今日に至った。なぜなのか突きつめて考えたことはないが、きつと目の前の生徒たちがワルをして困らせたり、部活動などで苦しい場面を乗り越え、すばらしい笑顔、そして感動を与えてくれたりしたからであろうと思っている。私は担任の時は学級目標を、そして校長になってからは学校目標を「情熱・挑戦・思いやり」と設定してきた。これは、私が教師になる前、社会人として大事なことは、決して今まで習得してきた知識ではなく、人との関わりの中で「情熱・挑戦・思いやり」が大切と実感してきたからである。

あまり後輩の先生方の参考にはならないだろうが、「情熱を傾け率先垂範していくこと」「決して傲慢にならず謙虚に努力すること」「そして人のため、社会のため貢献すること」、このことが生徒のみならず教師にとっても大切なことだと、私は考えている。それでは、この三つの目標に向かって、具体的に自分が教師として取り組んできたことの中で、力を入れてきたことは何かと強いて言えば、勉強の嫌いな生徒との関わりだと思っている。

中学校においてどんな立場にいてもストレスを感じるのは、非行や問題行動を抱えた生徒や親への対応である。大事なことはこちらから率先して信頼を得るべく、関わりを持つていくことである。逃げずに関わりを持つていく中から、今、何を欲しているのかがつかめるはずであると思う。

私が今までに携わってきたのは、自宅に呼んでの宿泊。一緒に山遊びや川遊びをすること。野菜の栽培や木製ベンチなどを製作し、社会貢献をすること。夜、家庭訪問をするか私の自宅か、学校かで一緒に勉強をすること。また、こうしたことのできる教員の輪を広げていくこと等々。教員数の加配が難しい中にあるは、信頼できる地域での支援者や学生ボランティアの援助をいただいていた。関わった全部がうまくいったとは思っていないが、中学校を卒業してからも、今度は私を助けてくれる子がいるのは何とも楽しい。

さて、中学校に勤務して感じることは、学習指導ももちろん大切ではあるが、より以上にきめ細かな生徒指導が大切だということである。勉強さえできれば、自分さえよければの考えがはびこる今の世の中である。貧弱な心しか持たない頭でっかちではダメなのである。

私たちは、ノーベル賞受賞の田中さんのような優秀な人材を育てることばかりが目的ではない。勉強はできるに越したことはないが、それはほどほどでも、人から愛され、喜ばれ、そして信頼され、将来世の中を、自分の足でしっかりと歩いていける生徒に指導していくことが必要と確信している。

いつも心に「情熱・挑戦・思いやり」を忘れずに。

第一ステージを終えるにあたって

私たち「団塊の世代」は第二次世界大戦後に生まれ、激動の戦後日本の歩みと共に生きてきた。経済、政治、社会もここ六十数年で激変した。教育界も戦後大きく変化した。高校進学率の上昇、偏差値の登場、受験戦争、落ちこぼれ、校内暴力、ゆとり教育、学校週五日制、学級崩壊、不登校、いじめ等々の言葉は、戦後教育界が経験した歴史である。

私は、子どもたちに学ぶことの楽しさと子どもたちの夢を育む仕事に憧れ、教師の道を選んだ。しかし、現実には楽しさと同じくらい苦勞を経験した。

一九六八年、日本のGNPがアメリカに次いで世界第二位になり、大量生産、大量消費の時代に入り、高学歴志向が高まった。これに照応して、教育内容も「より高度で抽象的な思考」を求めるものに変更された。高校進学率が急速に伸び、生徒の質も多様化し、家出、シンナー、暴走、校内暴力といった非行に走る生徒が急増した。私は当時、担任と生徒指導主事を任せられていた。特に、家出生徒の問題、暴走族といわれた若者に同調する生徒の扱いには苦慮した。これらの生徒は家庭や外部とのつながりが大きな障害となった。「真の人間関係とは」といった根元的な話をしたのもこの時代であった。家出した生徒は、長期欠席のおそれがあったため、あらゆる連絡網を駆使して探し出した。そして、その生徒とは納得するまで話し合いの時間を持つと同時に、家庭訪問をし、生徒の家族とも、何度も、何度も話し合いを持った。このことから、家庭と学校、外部の関係機関の連携の大切さを学ぶことができた。

大きな問題となった校内暴力の解決策を探ったのもこの時期である。これらの現象は学力不振に端を発するケースが多く見られた。私は最初に、担当教科である保健体育の授業を変えた。

個々の運動能力を重視するのではなく、グループの中でどれだけ自分を生かしているかを重視するようにした。具体的には、真面目な授業態度、努力、積極性、協調性等を重視し評価した。また、教科外では部活動を重視した。放課後自分の居場所がない生徒が、問題行動を起こす傾向をとらえ、部活動への参加を積極的に呼びかけた。日常の練習、土曜、日曜の練習試合を通して、生徒同士のコミュニケーションを図るよう工夫した。勝敗だけにこだわらない対外試合は、生徒の意識を変える効果をもたらした。

一九九八年の学習指導要領の改訂では、「心の教育」「自分探し」「生きる力」「総合的な学習の時間」「授業内容の三割削減」などが学校現場に導入された。従来の学力偏重から脱却を図るという点では歓迎すべき改訂であった。「総合的な学習の時間」については試行錯誤の繰り返しであったが、新しい授業形態を生み出すことが出来た。即ち、「生徒を教えるのは学校の教師である」という概念を根底から変えることになった。地域の人たちが生徒の指導に関わるようになったのである。私は、生徒の地域社会でのボランティア活動を積極的に推進している。また「ものづくり」の大切さ、楽しさを学習させる一環として、農業のプロに野菜等の栽培方法の指導をお願いしている。

今年の六月に学校教育法が改正された。「副校長」「主幹教諭」「指導教諭」などの職が設置されることになる。しかし、いつの時代でも教師に求められるのは、子どもの健全な成長をはかるための努力を怠ってはいけないことだと思う。そのためには、日ごろの自己研鑽が求められる。これからの先生方にこのことを期待したい。

轍は遺ったか

唐突ではあるが、結論から先に述べさせていただく。

職務は選ぶべきものではなく、賦与されるものであるということ。自分の適性に叶った仕事、職務などある筈もない。ひたすら、今この時こそ大事と心得る以外道はない。結論、「与えられた仕事を懸命に努めよ。」である。

初任校は母校であった。ひたすら、子どもたちと土日も放課後もなく遊んだ。学力テストがあれば、他のクラスに負けたくない、できるようになるまで残して指導した。学級対抗球技大会は、勝つことにのみ集中した。図工の作品も作文もであった。まさしく、学級王国であった。二年目から体育主任。町内対抗の陸上、水泳大会、学校毎に点数がはじかれた。そんな年、インフルエンザの流行、散々な結末。恩師である指導主事から追い打ちが掛かった。「お前何やってんだ。」この一言が、日本水泳連盟や県水泳連盟の学童水泳優秀校をもたらした。乱暴で荒削りな指導の連続と反省しきりではあるが、教師として最も楽しい時代であった。

校長から一通の書類を渡され、やってみないかの薦め、在外教育施設での仕事であった。久しぶりの受験勉強、面接では水泳指導のことを聞かれた。赴任先はバンコクであった。

熱風のタイ王国は、年数回のクーデターと首都バンコクを襲う洪水、治安の酷さは、危機管理の域を超えた状況であった。更なる課題は、タイ国教員免許取得のための試験である。幸い合格し強制送還は免れた。

保護者の現地勤務の期間は概ね三年、児童の転出入も同様、国内同様の学力の保持と海外ならではの体験が求められる。異なった環境下で教材開発の苦闘が続いた。頼らず自ら動く、直

ちにやらねばならぬことを自らに課し続けた三年間であった。

帰国、再び母校に赴任。体育主任は後輩が担っていた。苦渋の自分探しの旅が始まった。研究教科を算数に絞った。教材を研究し単元計画を組み換え、学習活動を創り出す。指導案を何度も書き換え実践検証しまとめる。これを繰り返して同好会に持ち込んだ。県内各地の先輩教師は、厳しく指摘し後の酒席で優しく励ましてくれた。こんな日々が続く、実践事例集も出版された。関プロ大会では、四年連続発表の機会をいただいた。内地留学の機会もいただいた。

折しも、新学習指導要領に生活科新設の話題が上り始めていた。研究したいとの思いが通じ、町指定の研究校となった。告示前の学習指導要領のこと、生活科の名称は使用不可の状態の研究が進められた。同僚の意欲は旺盛そのもの、ありがたいの一言に尽きた。

町教委の指導主事となり、私に課せられたのは同和教育である。先輩指導主事の足跡を追った。町内六校の同和教育推進の方向を誤らぬために、また同和教育の解消にも関わることになった。行政交渉は厳しいものであった。行政の職務遂行の手法の違いを目の当たりにした。

教頭職を三年、校長として九年、三校目となった。学校のトップとして、あらゆる状況に直面した。危機を体験し大概のことには動じないとの自負、慢心が最も恐ろしいと肝に銘じたい。残すところ一年有余、今、特別支援教育は喫緊の課題、個への指導と集団への指導の調和を図らねばならない。事上錬磨、事に臨んで己を磨く。二〇年近く座右に置いた書物「言志四録」「百朝集」「菜根譚」まだまだ、手放せない。

学校栄養職員としての食への取り組み

給食室の新築、調理業務の民間委託、給食研究会の事務局長等々、多様な取り組みがあり、気がついてみると本校勤務も十九年目を迎えていました。これらの取り組みの中で気付いたことを振り返ってみたいと思います。

一つ目は、給食指導と生徒指導の密接な関係を痛感してきたことです。つまり生徒が乱れてくると給食指導も乱れ、生徒が良くなると給食指導も充実してくるということです。この点を重視し、五年前から「給食時における生徒指導の充実」を前面に揚げて、教師との関わりを大切にしつつも、全職員の役割分担を明確化し、指導を進めてきました。校長、教頭に自分の思いを具申し、職員の協力体制作りに、強力なバックアップもいただきました。その結果、給食委員会の活性化をはじめ、給食当番の身支度の徹底、迅速な活動、クラスの協力体制が定着してきたのです。その結果、生徒のみならず全職員の食への関心が高まり、副産物として給食の残量の著しい減少につながりました。改めて組織の偉大さに気付かされています。

二つ目は、献立作りの重要性です。食事が健康の土台であるならば、献立は、給食指導、食育の土台となることを確信したからです。ここをしつかりおさえておけば、職員からの信頼、食育、衛生管理、調理指導等、次のステップが、とても楽になるはずです。そこで忘れてならないのが和食への取り組みです。日本には古くから「主食・主菜・副菜・汁」という伝統的な食事形態があります。この食文化をぜひ継承していただきたいのです。世界の人々が認めている和食のもつ素晴らしさを日本子どもたちに伝えていただきたいのです。ともすると、児童生徒が好んで食する欧米化の食事内容に陥りやすい傾向がみられますが、和食の良さを追求し、

提供していくことで、児童生徒との接点が見えてくると思います。私は和食の献立と洋食の献立の栄養面での比較をグラフにして、機会あるごとに話をしてきました。すべての献立に該当する訳ではありませんが、不足しがちなミネラル分がとれること、脂質が押さえられること、主食である米の素晴らしさなどをアピールしてきました。特に、生徒の好きな味付けにしたわけではありませんが、煮物であれ、和えものであれ自然と食べるようになりました。これも指導できる環境、体制作りが定着したおかげと実感しています。もう一つ、給食を提供する上で忘れてならないのが、食べる側の評価です。どんな方法でも良いと思いますが、私はクラスの給食日誌を通して生徒からの評価を受けています。味、量、献立内容など、気付いた事を思うままに記入してもらっています。これは評価に留まらず、生徒と栄養士、生徒と調理員のコミュニケーションにも役立つことを期待しての実践です。

三つ目の食への取り組みは、「人はなぜ食べるの」「何を食べたらいいの」「どのように食べたらいいの」こんな基礎基本を含めて、生徒の実態に即した指導を行うことです。欲張らずその年にやりたいこと、できることを重点目標とし、それでいて単発的なものでなく、次年度に継続できることを心がけているのが現状です。本校では、一食分の食事を考えさせ、修正し、クラス献立を作る授業を行い、その献立を給食に導入することが、恒例の行事となっています。

思うがままに経験を述べてきましたが、参考になるか不安です。栄養教諭制度が確立された今、食のアドバイザーとしての知識を豊かにし、「自分の健康を考えた食事ができる子ども」を育てていただきたいと願っています。

退職を前に思うことなど

今回のこの企画で、団塊の世代のメッセージを書くことになった。団塊の世代だからといって、他の世代の人たちと特に変わった経験や考えがあるはずはないが、退職を前に、思うところを記してみたい。

教師生活三十有余年を通して、数えきれぬほどの子どもと向き合い、様々な行動を共にしてきたが、今でも交流がある教え子は、部活動を共にした子どもたちである。私は、ずっとサッカー部一筋で、一番熱心だったのは、二十代後半から三十代後半にかけてであった。その間、それこそ家庭も顧みず、サッカーのシーズン中は、休みといえば指導に明け暮れていた。詳しい年は忘れてしまったが、その頃、国民体育大会の栃木大会が、宇都宮市を中心に開催され、県の陸上競技場での開会式に、小学生のボールリフティングがアトラクションとして披露されることになった。私の指導するサッカー部にも十人の割り当てがきたので、日曜日ごとに、補欠を含めた十数名の児童を連れて、宇都宮まで通ったものである。往復の電車の中での子どもたちとの交流もとても楽しく、いい思い出になっている。開会式当日の華やかさとともに、子どもたちにとっても私にとっても、サッカー人生の一つのハイライトであった。

部活動の良さの一つは、教師と児童が、年齢差や立場を超え、同じ目標に向かって連携できるところである。勝つて共に喜び、負けて共に泣き、ともかく子どもたちと想いを同じにして、一つの目的に夢中になれることが、スポーツの素晴らしさであろう。部活動を共にすると、子どもたちとは人間対人間の付き合いができ、互いの心の結び付きがぐっと深まるものである。そして、このことは、児童指導や教科の指導でも大いに役立ち、教師としての指導力の向上に

もつながるのである。

当時サッカーを指導した子どもたちは、今では、ほとんどが良きパパになっているが、今でも時々集まって、旧交を温め合いながら、サッカーの思い出話に花を咲かせて、楽しい時間を過ごしている。この子たちとの交流は、私の教師としての大きな財産である。近年、スポーツ少年団への移行に伴い、部活動を指導していない若い教員が増えているが、部活動の素晴らしさを知ることができないのは、教師として不幸ではないかとも思っている。

夢中になってやってきたことといえば、私にはもう一つある。それは、英会話の学習である。小学生の頃から、近所の教会で開かれる英語教室に通ったおかげで、もともと英語は得意で、高校生の頃には、教会を訪れる外国人と多少は会話ができたものである。ところが、教員になって何年か過ぎたある日、外国人と会う機会があつて、話をしようとしたのだが、まったく英語が口から出てこないことがあつた。大学の後半からの英語学習のブランクが、いかに大きかったかを思い知らされ、ショックであった。その後、何か一つ外国語が話せるのも人生を豊かにするものと思い、再度英会話の学習を始めて現在に至っている。今は日常会話程度なら不自由なく話せるようになった。

以前は、自分の英会話が、学校で役立つなど思ってもみなかったが、小学校でも英語の学習が盛んになるにつれて、A・L・Tとの打ち合わせや、カリキュラムへのアドバイスなどで、私の英会話が、少しは重宝されるようになってきた。今後も特技として学習を続け、先生方や児童への刺激になれば良いと思っている。

忘れ得ぬ出会い・言葉・出来事

私の原点

私の初任地は、山々に囲まれた小さな小学校でした。ニコニコしたふくよかなお顔の校長先生を含めて、九名の教職員が私を迎えてくれました。さっそく職員会議、私の下宿先はどこがよいかがその議題だったので、先生方の温かさに感動し、緊張がちょっぴり減りました。学校に近い田畑の中の大きなワラ屋根の農家が、全員一致で下宿先に決まりました。家族は三人で、私には奥座敷が与えられました。朝夕の心のこもった手料理と囲炉裏を囲んでの語らい、そして宿直の合間には先生方が来てくれました。学校の昼休みには、子供たちと裏山にキノコやワラビ採りにも行きました。

この小学校は、統計教育の研究指定校でした。研究主任の先生は「養護教諭も統計の勉強は必要。データをグラフ化することで資料が生きてくる。見えにくかったものが見えてわかりやすくなる。」と話されました。私は自分にできる統計は何かを考え、大きな模造紙に保健室利用状況の棒グラフと円グラフを描きました。これが私の統計グラフとの出会いでした。健康診断結果を始めとして、保健室利用状況、災害給付状況、歯磨き状況、各種の調査結果などのグラフ化は、学校全体や子供一人一人の健康の実態の把握にとっても役立ちました。この小学校で学んだ「実態をグラフ化し、そこから見えてくる問題点を明確にし、実施可能な対策を立て、実施後の反省点と課題を次に生かすこと」、これが私の執務の原点であり、以後今までの三十余年の執務の中に常に統計グラフがありました。その成果の一つとして、給食後の歯磨き状況のグラフ化により、ほとんどの学級が歯磨き実施率百パーセントになったことが印象深く心に残っています。

また、初任の頃は不登校もいじめも引きこもりもなく、元気な子供たちとの毎日が夢のようにでした。近年はコミュニケーションが苦手で、集団不応答を起こして不登校になったり、保健室登校や支援機関を利用したりする子供たちが増加しています。学校にはスクールカウンセラーや心の相談員が配置されて、対応に当たっています。その中で養護教諭の役割は大きいと思います。毎日の学校生活で子供たちの身近にいるのは養護教諭です。私も長い養護教諭生活に区切りをつける年齢になりましたが、その中で、教育は人を育てることであり、人は真つ直ぐにも曲がつたりもして育つものと教えられました。できるだけ真つ直ぐに育てることが養護教諭の行う心身の健康教育だと思います。大切なのは、その子供たちの健康状態、生育歴、家庭環境、友人関係、部活動等を熟知するよう常にアンテナを高くし、子供の表情から変化を察知し見逃さないことだと思います。

あるとき、小学校で学級崩壊の中心的存在だった生徒が中学校に入学してきました。彼は授業にも集中せず、毎日保健室に顔を出しては小学校時の悪さを得意になって語っていました。しかし、中学三年になったときには、下級生の指導で思案している私に、「先生も困っているのかよ、言ってみな。」先輩の俺が話してやろうか、俺もそうだったからな。」などと、落着いて話をするまでになりました。その後、彼は文化祭のバンド演奏に向けての練習に夢中になるようになり、保健室にも時々しか顔を見せなくなりました。

児童生徒の成長を感じることができるとは、学校で生活する教職員の醍醐味であると思います。生徒と温かい触れ合いができたのは、初任での体験があったからです。あのとき人々の温かさに触れたことも私の原点でした。

A 先生から学んだこと…MAP

「その時歴史が動いた」というように、転機となったその時は、後になって気づくのが一般的なようです。思えば、私を教師の道に導いた最初の一步は、情熱と使命感にあふれた、あのA先生との出会いだったのかも知れません。

中学時代、私は柔道部に所属していましたが、二年生の時、体調を崩してからは練習にも行かず、ふらふらしていました。そんな時「音楽をやってみないか。」とA先生から半ば強制的に誘われ、吹奏楽部に入部してしまいました。

当時の吹奏楽部は出来たばかりで、他の部との掛け持ちが多く、いわゆる寄せ集めの部でしたが、顧問のA先生の指導は大変熱心でした。毎日、部活に来て、いい音が出なければ、出るまで我慢強く待つといった具合です。

さらに三年生になると、「純粹部員はあなたただだから」という理由で今度は部長を務めることになってしまいました。なにせ、寄せ集めの部だけに部員の心はなかなかまとまらず、正直部長として悩みました。コンクール曲は仕上がる自信もありませんでした。いよいよ夏のコンクールが迫り、A先生と出場の有無を話し合いましたが、私の答えは「NO!」。未完成の曲をブザマに演奏するのが嫌であり、惨めに思えたのです。つまり、逃げたのです。

コンクール当日、私たちは客席で他校の演奏を聴くこととなりました。案の定、他校の演奏は素晴らしく、カルチャーショックでした。しかし、それ以上に私たちの心を打ったのは小さな学校でも頑張っている生徒の姿でした。ミスだらけの演奏なのに、誰一人として嘲笑する観客はいませんでした。演奏後の大きな拍手に部員たちも感動していました。それは、バラバラ

だった部員の心が一つになった瞬間でもありました。A先生は感動することの素晴らしさを教え、「やればできる。」という自信とやる気を引き出してくれたのです。

夏休みの終盤には、秋の音楽祭に向けて、猛練習の中にも活気に満ちた部員全員の姿がありました。午後は三年生だけの勉強会、そして部活動終了後の無駄話がこれまた楽しく、充実した一日を終えるのです。この地道で単純な繰り返しの中、教師と生徒、生徒と生徒が喜びや悲しみを共にし、それぞれの絆を深め、生きる力を育てていったのではないのでしょうか。

今、学校では、「生きる力の育成」をスローガンに様々な施策が展開されています。放課後ともなれば、教員の資質向上のための研修も、家庭や地域との連携も必要でしょうし、教師にとって明日の教材研究、授業の準備も必要です。しかし、それらが子ども不在であっては何の意味もなさないことは明白です。教師は子どもと共に育つことを忘れてはなりません。

スポーツジャーナリストの二宮清純氏はスポーツ指導者にとって大事なものはMission（使命感）、Action（行動力）、Passion（情熱）だと言っています。スポーツ指導者に限らず、教師としても大事にしたい重要な要素ではないでしょうか。私は、かつて学んだA先生に思いを寄せながら、その頭文字をとって、MAPとしました。英和辞典によれば、MAPとは「地図」の他に顔、写像、あるいは「く」を計画する「く」を描く」などといった意味もあるようです。教育的にはどんな子どもに育てたいのか、そのためにどんな指導経営をするのか、しっかりと思い描き、行動することが大切です。

教師人生も残り少なくなってきましたが、これからもMAPの心を大切にし、頑張っていきたいと考えています。

過去にこんな言葉をいただきました

★子ども時代

○学校で習わないものの方がずっと多い。将来、知らないことに出くわした時にもそう言うのか。(小学生の時、テストができなかった理由を「学校で習わなかった。」と言って、父から)○できないと嘆くのは努力した人が言えること。二ヶ月頑張ってダメだったら、もう一度来なさい。(高校の時、学力不振で相談に行ったとき担任から)

★教員一年目

○あなた方は若さという能力で、何もなくても子供たちから好かれ慕われることでしょ。二十年経ったとき、何を持っていたら魅力ある教師と言ってもらえるでしょうか。(新任教員辞令交付式で上都賀教育事務所長の挨拶)

○あなたが知らなくても、地域の人はあなたのことを知っていて関心もある。校外でも、知らなくてもあいさつをしなさい。(新採着任の日、校長第一声)

○先生！子供たちが教室で待ってるよ。(子供たちにかわかれ給食室で泣いていて、調理員さんから励まされ：：)

○どんな仕事だつて苦労はあるよ。(「辞めたい」と言つて、母から)

○理屈言つてないで、どうしたらできるか考えな！(先輩先生が笑顔で)

○泣いている場合じゃない。早く教室に行きなさい。(生徒指導で立ち往生して先輩先生から怒鳴られ：：)

★教員として生意気時代

○私たち教師は、数学のプロじゃなくて数学を教えるプロだ。(数学主任から)

○魅力的な授業は話術と道具。(数学の授業がべらぼうにウマイ先生から)

○学年で相談しましたか？(いい企画(のつもり)を持っていつて、校長から)

★学年主任になって

○学年主任がすっかりしなくてどうする！(生徒指導の問題で教頭から)

○主任！楽しみましようよ。俺たちも。(行事を無事終わりにすることばかり考えていた私に、若い教員から)

○苦手もある。(生徒指導の場面で「苦手」と呟いた時、生徒指導主事から)

○春の来ない冬はない。(中学校暗黒の時代に、教育長から)

○筋道の通らない仕事をしてはダメだ。(教務主任から全教職員に)

★教育委員会に勤務して

○巡り合わせでここにいるんだよ。(勉強している先生がたくさんいることを忘れないようにと、教育長から)

★教頭になって

○大物教頭より名教頭になれ！(赴任にあたって上都賀教育事務所長から)

○学校の施設はぜくろんぶ教頭先生のもの！(「先生たちは準備室があつていいなあ」の愚痴に、事務長から熱い視線が：：)

★校長になって

○器が人を創るつてこともある。(赴任を前に県義務教育課長から)

○嫁に来て、以来、ずっとここが好き！(大沢地区体育祭でお年寄りから)

○これまでにいただいた私の宝です。年齢とともにいただく言葉も少なくなります。何も言ってもらえなくなったら、「黄色信号」点滅です。

読書の大切さ

大学を卒業し、最初に赴任した学校は、黒羽（現在の大田原市）の中学校でした。

二年生の担任で、どう生徒と接したらよいのか、戸惑いの毎日でしたが、生徒理解の一助として先輩から勧められたのが、グループノートの活用でした。

生活班ごとにノート一冊を渡し、毎日交代で提出させることにしました。

子どもたちは、生活のこと、学習のこと、家庭での出来事など、グループノートに自由に書いてきました。グループノートを通して生徒の考えや行動、友人関係を理解することができ、私にとっては、大いに生徒理解に役だったように思います。

毎年、グループノートが続けていましたが、読書好きの生徒は、読んだ本の感想を書いてくるがありました。

ある生徒がヘルマン・ヘッセの「シッダルタ」を読んだ感想を書いてきました。その本を読んではなかった私は、さっそく買い求め、急いで読んで、私なりの感想を書いたことがあります。また、本が好きで、本の話題が多い生徒がいて、どんな本を読み、どんな感想を書いてくるか、楽しみにしていました。

今、その子どもたちは、教員や会社員として活躍しています。たまに会う同窓会や年賀状のやり取りの中で本のが話題になったりします。感情が豊かだったり、よく考えしつかりした意見を述べることでできた生徒たちで、読書好きが人間形成の一つの基盤になったように思います。

また、数年前に勤務した茂木町の小規模の小学校では、読書活動が盛んで子どもたちは競っ

て本を読んでいた。毎月、計画的に読み聞かせの会の方々に来ていただき、全校生対象に読み聞かせを実施していました。子どもたちは、それを楽しみにしていて、目を輝かせ熱心に耳を傾けていたことが印象に残っています。また、年度ごとに工夫をし、上級生が下級生に読み聞かせをすることを取り入れたり、先生方も各教室で読み聞かせをしたりと、読書に親しむ環境づくりができていました。休み時間や昼休みなど、よく本を読んでいる風景を目にし、心豊かな子どもたちが育つことを念じながら、教員が協力し、育てていたように思います。

現任校では、十分間の朝の読書を実施しています。思い思いの本を準備し、始業前、静かに取り組み、落ち着いた雰囲気です。授業に臨めるようになってきています。毎日続けることで、読書を通して視野を広めるとともに、集中力も身につく、豊かな人間性の基礎作りになると考えています。

なお、私自身と本の関係を考えてみると仕事や人間関係で行き詰ったり、人生の課題に出会ったりしたときに、本の中から、ヒントを得たこともあったように思います。本から直接理解できたこともあり、以前に読んだ本の一文が頭に残っていて、役に立ったこともありました。子どもたちには、本を通して心豊かに育ってほしいと常々思っています。そのために、学校教育の中での読書活動の役割は大きいものがあると思います。

読書活動を通して、子どもたちを育てるとともに、我々にとっても、心豊かな人間になるためには、読書が欠かせないと思います。

教員生活も残り少なくなりましたが、最近つくづく、読書の重要性を強く感じています。

担任教師の一言から…

一、教師になったいきさつ

話は、私の中学校時代に遡る。昭和三十年代後半、学力テストの花盛りの頃で、母校N中学校のどの先生方も、教育に燃えていた。とりわけ、数学担当のI先生は、あたかも「スパルタ教師」のように、毎時間、自作のテストを用意し、一、二分間のミニテスト（今のドリル形式の先駆け）を実践されていた。先生自ら、ストップウォッチを首に下げ、生徒には負けぬ速さで問題を解く姿、生徒一人一人に分かるまで教えてくださる本気の姿に、誰もが数学の楽しさを学んでいた。そんな中、私自身、いつしか「I先生のような、すばらしい先生になりたい」と思うようになっていた。当然、教師を目指して、普通高校を受験しようとしていたが、運悪く、中三の三学期、私の両親が共に病気になってしまった。経済的に兄に負担をかけられない状態から、止むなく就職に有利なT工業高校へ願書を提出せざるを得なかったのである。私の将来の夢・希望を察して、何とか教師の道が優位に開ける普通高校を受験させてほしいと、担任のI先生は、わざわざ私の家まで来てくださったのであった。その帰り際、I先生は、私を慰めるかのように、

「工業高校でも、本人が大学へ行く気さえあれば、努力次第で行けるのだから…。」と、言われた。この時、その一言が、私の以後の人生を左右する言葉になろうとは想像さえもできなかった。

やがて、T工業高校三年の春、進路を決めねばならぬ時が来た。その頃になると、病弱な両親が元気を回復し、経済的にも楽になっていったようだ。自然に、一度諦めかけていた「先生に

なりたい」という夢が、脳裏に浮かび上がってきたのである。当然、中学校担任のあの一言が思い出されていたのだ。しかし、努力不足のため、教師の道を諦め、工業系の大学、大学院に学ぶことになったのだが、再び勇気を取り戻し、教員養成系の大学に入学し、三十歳にて教壇に立つことになったのである。担任の一言の大事さを改めて思うのである。

二、研究授業での苦い思い出

教職七、八年目の理科の公開研究授業でのことである。前日、夜遅くまで準備し、自信をもって臨んだ「ものの燃え方と空気」の単元で、上部が開いたペットボトルの中ろうそくの火は、空気が入れかわらないため、やがて火は消えるはずだった。しかし、実験をしていたA君の班だけ消えなかった。

「火は消えません。もう一回、実験はやり直すべきと思います。」

早く、まとめねばと考えていた私の頭は、A君の発言でパニックとなってしまうた。授業後、指導主事の先生から、講評として、「すばらしい子どもを育てていますね。」と言われたが、今も忘れられない、苦い思い出でもある。あの時、すべての子どもたちの意見を素直に取り上げることの大事さを学んだものである。

三、退職年齢に近づいて

三十年近く、「何事も全力で頑張る」ことを第一にして教員生活をしてきたが、一昨年六月、病気を経験し、改めて生命の大切さと共に「頑張りが過ぎないで、頑張る」ことの大切さを知った。教師として、時には心身共にリラックスして教育活動に励むことの大切さを、今になって思うのである。

「ことばの教室」に学ぶ ―出会いと教訓―

教師を志して教職に就き、三十七年が終わる。今しみじみ思うことは、教育の大前提は「子供を大事にする」ことであり、「かわいがればかわいがる程いい子が育つ」というごく当たり前の結論である。

そのベースになっているのは、十八年間「ことばの教室」を担任し、二百人を超える、ことばや心に問題・障害をもった子供たち、いわゆる言語障害児との臨床である。子供のあるがままを受け入れ、どんな援助を必要としているのかを見極め、ただひたすらつきあうこと。喜ぶことを見つけ、せつせと相手をするのである。そんな中から、子供との信頼関係が築かれ、安心したやりとりとともに言語治療ができたように思う。また、言語障害児教育は、障害や問題そのものを取り出し治療するという「特別」な子供に対する「特別」な教育ではない。むしろ、ある問題や障害をもった子供を取り巻く周りの人たち、つまり親や家族そして教師・地域の人たちの、その子へのよりよいかかわりを追究していく営みであり、問題や障害をもちながらも、周りの人たちと明るく元気に生活ができるよう手助けをしていくことなのである。アメリカの言語学者ウエンデル・ジョンソンの次のことばは、教科書であり、基本姿勢でもある。「子供の言うことをよく聞くんです、今その子が言っていることも、今まさに言わんとしていることも、まだぜんぜん言えていないことも。その子はあなたに言いたいことがあるんです、その子にとっては意味のあることなんです、その子には大事なことなんです。ただのおしゃべり遊びだなどと思ってはいけません。―後略―」

三十四年前、言語障害児教育への誘いがあった。その時断っていたら、尊敬する三人の師に出会えなかったし、今の自分はないだろう。その時の決断に運命を感じてならない。

二年程前に亡くなられたお茶の水女子大学名誉教授、故田口恒夫先生は、長年の臨床経験からアメリカ言語障害治療学を基に、独自のいわゆる「田口理論」を構築した臨床家である。著書「言語発達の臨床Ⅱ」（光生館）の中で、育ちそびれた人間関係（乳幼児期の母子関係が基盤）を育て直し、子供が安心して依存できる人間関係を築いていくことが、ことばの発達はもちろん人格形成にとって重要であることを説いた。この理論は、数多くの臨床の裏付けがあり、親や教師にとって救いとなった。生前に遺言のつもりで書いたと言っておられた著書「今、赤ちゃんが危ない―母子密着の育児の崩壊―」（近代文芸社）を一読いただくとよく分かる。

日本で最初にことばの教室担任をされた恩師の大熊喜代松先生には、内留で言語障害児教育の基礎を教えていただいた。中でも、「ことばの教室」は親の自己変革と親子関係の改善の手助けが重要であり、そのために「ことばを育てる親の会」の育成が不可欠であることを学んだ。著書「ママ、ボクの舌切ってよ」は、言語障害児に対する誤解や偏見をなくし、正しい理解を世に問う感動の書であり、この仕事を本気でやってみようと決断できた心に残る一冊であった。

黒磯小学校元校長、磯英世先生は、「ことばの教室」のよき理解者であり、そこに通う親と子を常に温かく見守って下さった。「ことばの教室」の担任として、いつも安心して、しかも思う存分仕事ができたと深く感謝したい。そして、先生教育理念「子供を大事にする。子供の命を大切にする。」は、学校経営の基本的姿勢として、今もしっかり受け継いでいる。

十八年間に三人の師の理論・理念を実証する事例がたくさん生まれ、親子の成長が手記として文集に綴られた。その一つ一つに、障害を乗り越えた親子の力強い生き方があった。その生き方に感動し励まされ、自分も成長できたことに感謝している。

たくさんの出会いに感謝

今から三十八年前、特殊学級担任として私の教職生活はスタートした。その当時は、特殊教育が教職員にさえ理解されていないという時代であった。私が特殊学級担任を希望したので、既に特殊学級担任を泣きながら引き受けていた先生は大変喜んでそうだ。毎年、誰が特殊学級を担任するか大騒ぎだったようで、私は、図らずも大先輩の先生方の不安を払拭するという役目を果たしたのだった。

私が特殊教育に強い関心を持つようになったのは、次の三つの出会いがあったからだと思っている。

一つ目は、一昨年、九十四歳で亡くなった父との出会いだろう。父の影響を受けたのではないかなということだ。父は、知的障害児施設に勤めていた。そのため、子供の頃から施設で暮らす知的障害児の様子を、折に触れて父から聞く機会があり、父の言葉から、世の中には温かい助けを必要とする人たちがいることを、子供心に感じ取っていたのだろう。

二つ目は、大学のサークルでの、ある友達との出会いだ。その友達は養護学校教員養成課程に籍を置いていた。その友達のある言葉が、私の心をとらえたのだった。「一生懸命に教えれば教えた分、成果が現れる教育があれば、同じことを繰り返し繰り返し、手を替え品を替え工夫を重ね何度も教えても、すぐには結果が見えない息の長い教育もある。世の中に、強い者と弱い者がいたとしたら、私は迷わず弱い者の味方につきたい。少しの可能性や変化を喜べる教師になりたい。」この言葉がきっかけで、知的障害児教育も学ぶことになった。

三つ目は、知的障害児教育の担当の教授・助教授との出会いだ。日本の特殊教育の草分けと

言われていたお二人の立派な先生の講義を受けることができた。先生の口から出る一つ一つの言葉、先生のからだ全体からにじみ出る豊かな人間性に引かれて、自分が将来どんな教師になりたいのが、少しずつ見えてきたような気がしたのだった。

様々な出会いの中でたくさんのことを学び、出会いで人生が変わることもある。今、しみじみそう思っている。そして、七年間の特殊学級担任の経験は、その後の私の学級経営や学校経営の原点となったのだった。

肢体不自由のY児と知的障害のK児が在籍する一年生を担当したことがあった。今なら市費負担の補助員が付くだろう。その当時は、これも一つの出会いと考えて担任が頑張るしかなかった。私も弱音を吐かずにこの二人を学級経営の中心に据えて頑張った。今年のお正月にこのクラスの同級会に招かれた。礼儀正しい成人になっていた。花束贈呈があった。花束を持って出てきたのは何と立派に成長したY児とK児だった。言葉では言い尽くせぬ感動を覚えた。

勉強ができてできなくても、運動が得意でも不得意でも、精一杯頑張る子供たち一人一人を大切にすることを信念としてやってきたことは、間違っていないかった。幼くても子供たちは分かってくれていたのだ。弱い者の立場を考えることの大切さを。この子供たちと出会って本当に良かった。

間もなく三十八年間の教職生活に終止符を打とうとしている自分をふり返り、今まで私を支えてくれたたくさんの出会いに感謝している。

○入選になるもならぬも教室に貼られし子らの絵は明るかり

(※特別支援教育関係の用語については当時のものを使用しています。)

編集後記

この度、多くの方の協力を得まして、本冊子「先輩教師からのメッセージ―小・中学校編―」を発行する運びとなりました。

玉稿をご執筆くださいました四十九名の先生方や養護教諭、事務職員、学校栄養職員の皆様に厚く御礼を申し上げます。

また、本冊子の作成に当たり、市町教育委員会、各教育事務所の皆様には、編集の進め方などにつきまして、細かなご助言・ご指導をいただきました。ご協力に対しまして、心より感謝申し上げます。

なお、本冊子の内容につきましては、栃木県総合教育センターのホームページより、ダウンロード可能です。学校等の教育機関において様々に活用され、お寄せいただいたメッセージが多くの方に伝わりますことを願っております。

※この事業は、次年度も継続し、「先輩教師からのメッセージ―県立学校編―」を編集する予定となっております。